

第11回銀華文学賞発表

銀華文学賞

当選

「天空に打つ」

工藤辰吾 (千葉県山武市)

「アクリル板」

原浩一郎 (滋賀県大津市)

河林満賞

「背信」 来の宮あんず (東京都江東区)

十一回目となった銀華文学賞は今回もまた日本全国およびインド、フランスなど海外からの作品を含め、三七六篇という多数の御応募をいただきました。厚く御礼申し上げます。予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・都築隆広・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。また御遺族の御厚意により河林満賞も併せて選出させていただきました。

誌面の都合により、奨励賞などの作品は六〇号以降に順次掲載させていただきます。

第十一回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇一五年二月一日(日曜日)午後二時より東京の大田区民プラザにて「文芸思潮」エッセイ賞/現代詩賞/イラスト・漫画賞/まほろば賞と併せて行なう予定です。どなたでも御参加可能ですので、どうぞお誘いのうえ御出席ください。

なお銀華文学賞はまことに申し訳ございませんが、新たな形へのため、二年ほどお休みをさせていただきます。まほろば賞など他の賞は継続いたします。投稿は受け付けます(掲載審査料三千円を添えて編集部にお送り下さい)。優秀な作品は文芸思潮優秀賞・奨励賞として掲載させていただきます。

優秀賞

「クーデター」

六藍光洋 (兵庫県神戸市)

「ワニタンうどんはソマリア・レシピ」

大森康宏 (兵庫県神戸市)

奨励賞

「ハーネス物語」 小笠原新 (山形県酒田市)

「首輪」 竹内 稔 (東京都西東京市)

「ガラスの檻」 櫻田秀三郎 (兵庫県宝塚市)

「父にあいたい」 浦上京子 (大阪府寝屋川市)

「シャガ」 脇田 正 (福岡県福岡市)

「ラスト・トゥデイ」 大島直次 (埼玉県新座市)

「妻恋い」 遠道日暮 (長野県大町市)

「捨てざる」 田代理恵 (東京都江東区)

歴史小説奨励賞

「猫忍の村」 大森耀平 (栃木県足利市)

「水車」 西田信博 (茨城県つくば市)

「景珂」 吉田宏子 (宮城県仙台市泉区)

「命日」 河野つとむ (神奈川県横浜)

「曇天のオリーブ」 田窪宣彦 (大阪府堺市)

「きのう。きょう。」 白石美津乃 (愛知県名古屋)

「霧ヶ丘公園のパポーマン」 王蜂^{キングベビー} (東京都多摩市)

「コーナー」で会った女 土岐田耕 (大阪府豊中市)



佳作

- 「斎場の雨音」 高岡啓次郎
- 「遊女の離縁状」 岡田治朗
- 「華やいだ幻想の彼方は」 佐山広平
- 「安謝浜疑獄」 平安名尚
- 「オメカケさん」 馬込太郎
- 「ふたたび青春を」 飯島もとめ
- 「再起をかける」 佐藤義弘
- 「水たまり」 氷川 順
- 「指」 渡邊眞美
- 「YES」 田中智之
- 「裏街、もしくはマーメイドの生成」 小林英実
- 「小さな昭和史『香椎会谈』」 森千恵子
- 「自転車泥棒」 紙屋里子
- 「旅の果て」 山崎人功
- 「ヘッドライト」 上村淳三
- 「秩父へ行く」 小野友貴枝
- 「月光の曲」 北条かおる
- 「遠雷人」 山本子峰

「就活」

- 「如月の虹」 井上理博
- 「傷」 安良川健介
- 「旅立ちの情景」 室町 眞
- 「絆歌」 芳井 明
- 「山の荷」 大見佐耕
- 「接着剤」 佐斗有崇緒
- 「揺らぐ照星」 林 道代
- 「ミノタウロスの水辺」 梶川洋一郎
- 「藤の台団地」 桐本千春
- 「盗蜜の味」 前岡光明
- 「契し男」 市原浩子
- 「まつぼっくり」 森 幸夫
- 「再生」 上野 歩
- 木川雅樹

歴史小説賞佳作

- 「遊女の離縁状」 岡田治朗
- 「安謝浜疑獄」 平安名尚
- 「仇討ち」 内藤久男

力作がそろった

大高雅博

今回は力作がそろった。力作というのは、オリジナリティーがある作品が多くあったということである。長年、下読みや、選考委員をやっていると、書き手のせいではないが、類型的な作品が目立つようになる。今回は、そうではない作品が多かったことになる。



当選作工藤辰吾「天空に打つ」は、そういう意味では今回の典型のような作品である。囲碁と、広島原爆と、呉清源。戦争中でも、本因坊戦を行おうとした人々がいた。それも、広島を舞台としてだ。当局のぎりおしで、会場が代わり、棋士達は助かった。すでに物語が始まっている。そして、最強の棋士といわれた呉清源が登場する。囲碁には門外漢の僕でも知っている棋士達が登場する。よく資料を調べてある。ノンフィクションに近いということ、時代物ではないかとの意見が出るかもとは考えた。しかし、

河林満賞の創設について

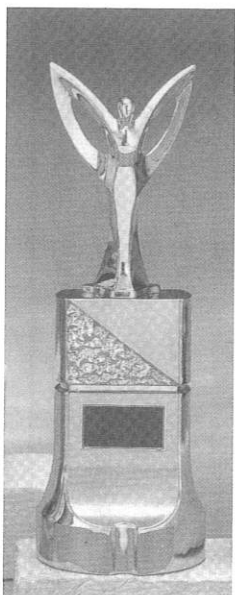
河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は銀華文学賞に応募される小説作品を対象にし、銀華文学賞選考委員によって銀華文学賞選考会において同時に選考され、御遺族の承認によって決定されます。

受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が銀華文学賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



結局は、あっさりど当選に決定した。良い作品である。
 当選作、原浩一郎「アクリル板」は死刑囚とその面会人とのシチュエーションで、前にも何度か言う小説は読んでいる。ただ、この死刑囚の、一筋縄ではいかない性格にリアリティを感じる。恐らく、実際にあったことなのだろう。その強みがある。

河林賞、来の宮あみず「背信」は、僕はこの作品も当選作で良いのではないかと思った。河林賞に選ばれて良かったと思う。この作品で、何か、どこかの境を越えたような気がする。ただ、この作品の魅力を伝えるのは難しい。筋を追っただけでは分からない。彼女の持っていた毒が薄れたのではないかとの意見もあったが、僕はそうは思わない。「小説」が持つている力の源泉のようなものに作者は近づきつつあるのかもしれない。

優秀作、六藍光洋「クーデター」はアフリカのODAを主題にした、珍しい作品である。

奨励賞、勢隆二「封鎖海峡」は戦後、奄美に帰る船について、書かれている。その海の描写が優れている。

同じく、田代理恵「捨て去る」は、土葬や猫が出てくるが、筋というよりは、独特の世界があり、興味をそそられる。

また櫻田秀三郎「ガラスの檻」は戦後、中国へ取材に行く話で、やはり書くべき話である。

その他にも、奨励賞小笠原新「ハーネス物語」(盲導犬

との話)、白石美津乃「きのう。きょう。」(亡くなった夫との思い出を中心に書かれているが、独特の雰囲気がある)は良かった。

桐本千春「ミノタウルの水辺」(珍しい少女が出てくるSM風の作品)佐藤孝男「山の荷」(祖母を背負って山に登るといふ、珍しい素材)上村淳三「ヘッドライト」(この枚数ということを考えると、エンターテイメントとしては良いできだと思ふ)田中智之「YES」(多少作り方に無理があるかもしれないが、衝撃力がある部分はある)にも注目した。

以上のように多種多彩で、実りの多い銀華文学賞となった。ただ、毎回言っているかも知れないが、題名は、後で、その題名を見たときに、内容がすぐに思い出せるようにした方がよい。これだけの量の作品を読むと、内容が良くても、すぐに思い出せない作品がある。それは、ひどくマイナスになる。細部まで、気を遣ってほしい。



銀華文学賞優秀賞メダル

入選

「心に住む魔物」	上杉 辰	「夢鉄道」	塩崎勝彦	「オットセイの骨」	伊藤一彦
「追憶」	五十嵐丈彦	「小屋」	右田洋一郎	「式典の後」	有原海実
「幻仙奇譚」	一之瀬和男	「邪馬台国 幻想」	蘭 藍子	「思い出帰り」	星野 透
「甲子夜話異聞」	千津敬紀	「カライモ畑の天使たち」	坂上弘之	「天国から来た暗殺者」	有汐明生
「一乗谷・諏訪館跡に立つ女」	藤井典典	「鶴が啼く」	飛葉哲郎	「大漁会館」	鈴木無一
「瓶の中の血」	清水利章	「共生生活」	西本美彦	「走る」	菅谷春子
「アデオス、アミーゴ」	佐藤英行	「深い疵」	赤間芳太郎	「呼び鈴」	上野雄三
「羽根雲」	小倉章志	「胸の洞」	丸山 史	「論告求刑」	小藤田一
「黄昏の彼方」	喜多文秀	「青花」	山田真弓	「思春期の未踏」	酒井一至
「墓参り」	十八鳴浜鷗	「魚鬼」	塩崎憲治	「風を追う」	武藤蓑子
「グレイプフルーツ」	菊池 洋	「化身」	杉山千里	「小さなスナック」	折口 真
「べんたるさん」	成平一平太	「津軽藩大量死事件その後」	野原憲次	「燎原の火」	横井純子
「わかれみち」	大江純子	「昭和の青春」	磯部 彰	「若葉の移ろう頃」	瀬川圭介
「図書館で知り合った老人」	森永昌雄	「ロケットペンダント」	椿山 滋樹	「わが落魄の思いは」	山本憲明
「すずらん」	吉田三夫	「妻はつらいよ」	三浦喜代子	「鎖まらない家」	齋藤澄子
「来訪者」	きひつかみ	「高越山」	高木 純	「告発」	有森信二
「幸福測定器」	中他見男	「富士を描く」	谷 光洋	「内間運送」	鈴木かのか
「片恋」	西谷 守	「はじまり」	田森 龍	「無価値の価値」	待木 啓
「ももいろ うーちゃん」	いまだまりこ	「嫁が鳥伝説」	白井 康	「山カフェ・シャングリラ」	井上幸子
「知床へ」	高岡賢三	「咲くやこの花」	丸山 温	「聡子の二週間と二日」	能勢里子
「東京薄暮地帯」	戸澤洋二	「散華の木」	関口 彰	「やまゆり荘物語」	龍野 健
「まどろみのそのさきへ」	舟橋空鬼	「アマランダの追憶」	李耶シャンカール	「牛若、鬼若物語」	ヒミ子

※今回も力のある作品が多かったため、入選として賞揚させていただきます。

鮮やかな二本が立つ

五十嵐 勉



第十一回となった今回の銀華文学賞は、トップに鮮やかな二本が立った。一つは工藤辰吾氏の「天空に打つ」で、もう一つは原浩一郎氏の「アクリル板」である。二作が傑出していたために、いつもは激論バトルになる選考会が、すんなり穏やかに、しかし充実して終わった。よい作品を選び出せたという満ち足りた気分が包まれたのは、私だけではなかったはずである。やはり文学賞は、トップに立つ優れた作品がものを言う。その作品の内質が賞全体の充実度を決めてしまうことを、あらためて感じた選考会だった。

「天空に打つ」の工藤氏は毎年興味深い題材を提出してくる歴史小説の領域の書き手だが、一作ごとに手腕が冴え、向上していることに注目はしていた。しかし今回の作品は抜群で、一つの結晶に到達した観がある。もともと題材に対する眼は、鋭いものがあり、埋もれた過去の時間の中から原石を掘り出す力は、「才能」と呼べる卓越したものを

備えていたが、この作品は特にすばらしい題材を掘り当てていた。

戦前・戦中の囲碁界の歴史を追いながら、日中戦争に重ねて、呉清源という才能の悲劇性を浮かび上がらせ、さらに太平洋戦争の東京空襲と原爆とのクライマックスに重ねて本因坊戦を照射して、その運命のドラマのなかに、歴史への深い告発を内包させることに成功している。ここにある感動は、囲碁という芸の世界が貫く純粹さと、それによって鮮明になる戦争という歴史の醜貌との対比である。逆にここには戦争によって滅びないもの、それを突き通してなおかつ生き延びる力を明示するものがある。そこまで書き得たことに、この小説の到達と成功とがある。囲碁を知らない人にも読める、圧倒的なドラマを備えている点で高く評価した。

もう一つの当選作、原浩一郎氏の「アクリル板」は、死刑執行される人間とアクリル板を隔てて会話をする元家裁判調査官の話である。死刑囚として、あるいはその裁判過程で、死と直面している人間の言葉に、作りものではない緊迫感があり、突きつける刃の鋭いリアリティがある。死を強要される人間と自由に生きていく人間と、その境界としてのアクリル板が、会話の剣戟を乗せて、真の言葉の斬り合いを投影する。殺しへと追い詰められる過程の運命と、殺される者として追い詰められる現在の運命の、両方の拷

問に耐える命の軌りがある。そしてそれを見つめるしかないこちら側の人間がいる。一枚の透明な板に、絶対の隔絶があり、その斬り合いのなかに、死刑執行される命の足掻きと意味が、いつそう重くのしかかってくる。死刑という社会が持つ負の部分を、これほど接近した言葉のやりとりの中に卑近に浮かび上がらせた作品を他に知らない。丸山健次の死刑囚を扱った芥川賞作品「夏の流れ」よりもずっと近い位置での言葉のやり取りは、アクリル板の接近感と殺される者の息づきをもっと近くにたぐり寄せて、死刑の實在のリアリティを鮮やかに感じさせる。失われる命の厳肅さを訴えてくる点で、賞に値する重みを感じた。

河林満賞の「背信」は、すでに二度優秀賞を受賞している来の宮あみず氏の作品だが、独特のモノローグの文体が一つの開眼を得たような展開力を感じた。むろん題材は古く、ありふれていて手垢のついた設定でもある。しかしここには執念の花が確かに咲いているのであって、この執着の幻想の上に開花したある運命観は、人生の一面を訴えている。浄瑠璃のような引き絞る声の深い嘆きを引き摺っている。この方法と世界を、来の宮氏は初めて自覚し、自己の文学世界の確立を意識したと思われる。これまで以上の筆の伸びやかさを感じる。到達した一つの基盤の上にさらに大輪が咲きそうな気配に期待して、河林賞に推した。

今回の銀華文学賞のもう一つの特徴は国際的な色彩が豊

かだったことである。結果的にそうなったのだが、外国を舞台にした作品に豊かな果実が見られた。銀華文学賞は熟年、老年の創作の題材に認知症などの病や老衰の問題、親子関係の問題などが多いが、その枠を破って地球規模の大きな舞台が広がるのはうれしいことである。考えてみれば、戦後の世代が外国旅行や外国での仕事の広い経験を持つのは、国際化が爆発的に進んだ二十世紀末では自然なことにはちがいない。そういう豊かな経験の中に優れた作品が生まれるのは当然だし、またそれが待たれる一面もある。佳作の作品も含め、今回はその結実が特に感じられた。

優秀賞の「クーデター」(六藍光洋)は、アフリカ・ニジェールでのODA通訳の体験を通して描かれた、現地の状況を軸にした政府援助の小説である。この作品の注目すべきところは、ODAの仕組みを含め、海外援助の姿が克明に記されている点である。これまでこのようにリアルに、またわかりやすくODAを小説として描いた作品はなかったのではないだろうか。それは通訳として立ち会った貴重な経験を通してしか語れないリアリティを持ち、重大な問題性を孕んでいる。また小説として成功しているのは、その援助の問題に留まらず、最後にクーデターという現地の不安定な状況によってすべてが無に帰してしまう不毛感を提出しているところにある。惜しむらくは「クーデター」というタイトルが一般的に過ぎ、主題を象徴し得ていない

点、援助に対する問題や批判を、状況ではなく、会話によつて一部浮かび上がらせようとしている点である。

やはりアフリカを舞台にした作品「ワニタンうどんはソマリア・レシビ」(大森康宏)は、アフリカ現地のリアリティは希薄だが、アフリカと日本を繋ぐ行動の拡大行為に不思議なリアリティがある。日本の日常にありふれたものが、発展途上国などで意外な普及力を示すそこに、現代の世界の広範な繋がりを感じさせる説得力がある。現実にはそううまくいかないことが多いのだから、樂觀的な行為が食という共通した日常性を通して大きな輪を広げていく可能性は確かにある。国境の壁がどんどん低くなっていく現代を、うどんのような身近なものを通して表現し得た着眼のよさを評価したい。うどん屋でアルバイトをするアフリカ人留学生が生きている。

これらに勝るとも劣らないやはり外国を舞台にした作品で特に注目したのは、第一次大戦直後のポーランド人孤児の送還を扱った「曇天のオリーブ」(田窪宣彦)である。この題材の特異さは、これまでまったく歴史の底に埋もれていたものを掘り上げた点で、異彩を放っている。ふつう外国を扱うと人物や風景描写が旅行者の目に映るもののように浮いてしまうものだが、それを感じさせない筆致は、長くその風土に馴染んできた経験に根ざしている。その風土に対する誠実さと愛情が、理知的な文章に溶け込

で、重い表現の基盤が感じられる。現代に生きる二世代後の後裔がこのポーランド孤児送還の軌跡を辿る設定もおもしろく、時間の隔たりをうまく立体的に構成していて、現在への再生力を強めている。

これは個人的偶然だが、この舞台の一つであるポーランドのクラクフを、私はちょうど二年前に訪れている。ユダヤ人虐殺の史跡アウシュビッツへ行くには、古都クラクフを経由するのが一般的なので、往復の二泊をそこで過ごしたのだが、歴史を感じさせる街は、ユダヤ人街やシナゴグなど屈折した過去もそのまま残っていて、様々な陰を蔵した重い雰囲気があった。その体験から、ここに書かれたクラクフの描写は本物であることを感じた。もう一つの偶然、アジア文化社の出版物として、「ユダヤ難民を救った男・樋口季一郎伝」をこの春編集していたことである。「曇天のオリーブ」には樋口季一郎という人物が謎の重要人物として登場する。事件の鍵を握っている男として最後までその存在を引き摺る。この「曇天のオリーブ」には、「ユダヤ難民を救った男・樋口季一郎伝」の若い頃の活動の一端に繋がる可能性が感じられる。樋口喜一郎が後年なぜナチスに追われた大勢のユダヤ人を救ったのか、その思考の軌跡に関わるものだとしたら、きわめて重要な事実が隠れているかもしれない。全体に第一次大戦後の日本のヨーロッパにおける諜報活動をよく匂わせている点、歴史の陰

に隠れた裏面をよく掘り起こしている点、そして東欧の空気を誠実に紡いでいる点で、重いものを感じた。ただ、惜しむらくは一つの発見にまで到達して、何かありそう「だ」とうやむやな気配のうちに閉じているのが、未完成な気がした。この筆者は樋口季一郎をどこまで知って書いているのか、未知数である。この作品のテーマの重みと匂い立つヨーロッパの雰囲気は優秀賞以上のレベルであることは感じたが、何かもう一つの決定的な発見か、あるいはフィクションとしての大胆な構築が最後に欠落していることを考えると、強く推せなかった。書き直すとなると枚数が増えることは当然だが、それら乗り越えてぜひ完成してほしい。

奨励賞でもう一つ魅かれたのは、「霧ヶ丘公園のパポーマン」(王峰)である。綱渡り芸人の生き方と挑戦の哲学的な問いを含んだこの作品は、いつ墜落するかわからない危険の上で何を求めるのか、人生の深い問いを象徴していることで、迫るものを胸の中に残す。「綱渡り日本縦断。全国都道府県にある高層ビルの上を綱渡りしながら日本を縦断するというパフォーマンス」は、結局墜落死で終わるのだが、世界中にその行為を続ける人たちが出沒する結末も、普遍的な深みを照らしていて、魅力がある。胸に残る一作だった。

「首輪」(竹内稔)は、戦争直後の食糧難の時代に愛犬を

人間に食べられてしまった話だが、流れに緊密な集積感があり、それがリアルな迫力となって人間の怖い部分と、時代や山里のすさまじさを浮かび上がらせている。その追い詰めていく収斂の力は並々ならぬ力量を感じたものの、題材がやや古いのと、犬を食べることを特殊に扱いつつに食べが気になった。アジアの地域では犬をごくふうに食べるし、沖繩の友人も愛犬を客の饗応に犠牲にした経験を話してくれた。犬喰いは、戦後という遠い位置の問題ではない。それらが少しマイナスにはなったが、練達の手腕はおおいに賞揚したい。

「きのう。きょう。」は、淡々とした日常を綴る文章のなかに生死や命の危うさがちりばめられていて、いい味を出している。軽妙なタッチは嫌みなく日々の不思議さを掘り下げる。ただ、読後がやはり軽くなってしまったのが惜しい。この文体で何か最後に胸に残すことができれば一流だろう。その可能性はあると見たい。

女性との情事のなかに人生の時を振り返って刻む一貫した筆を進める土岐田耕氏も、今回は「コーナー」で会った女」で新鮮な角度から健筆を示してくれたし、毎回変化に富んだ素材を作品にする小笠原新氏も犬のストーリー「ハーネス物語」で感動を構築していた。

歴史小説の分野は今回はやや不作だったが、「猫忍の村」の大森耀平氏は興味深い題材を手堅い筆致であいかわらず

の健在ぶりを示していた。

中国ものを一貫して書き続けている吉田宏子氏の「景珂」も姿勢の真摯さを感じた。

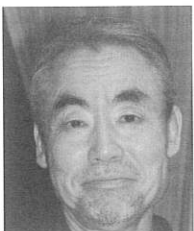
全体として、大きな結実を見せてくれた第十一回の銀華文学賞で、一つの大きな区切りを飾ることができた気がする。これまでの健闘に心からの拍手を送ると同時に、今後のさらなる健筆を深く祈りたい。

力作が集まった今回

八覚正大

第十一回目を迎えた今回は、かなりの力作が集まったといえよう。

最終選考に五十三作が残る……そんな賞は他にはないと思う。選考委員としてはくたびれる思いは感じるとともに、「人間という立体的様々な断面を描く行為」に



対し、選者というのも、これまた一人の人間の目からの判断（光の当て方）なわけで、色々な小説が有るのだと改めて学ばせてもらった……希有な賞。

さて、今回の受賞作「天空に打つ」（工藤辰吾）からこ

かつて、事実に基づく作品と調べて描いた作品の優劣が論じられたこともあった。それぞれ深まり行けば、それぞれに優れている——といってしまうは元も子もないだろうが、作品の優劣は読み手によって判断される。その読み手は今回なら、たとえば囲碁に必ずしも精通しているわけではない。そしてもちろん作者が爆風の中、本因坊戦に立ち会っていたわけでも、瀬越八段と面識がありその人物となり生で知っていたのでもあるまい。それなのに感動を与え、さらには賞の名に値するのはどうしてなのだろうか。それは神の目、揺るがない權威の目など実はないこの世の中で、事実を直接知らないにしても、想像力によって如何に「その場・空間」をリアルに伝えられ、かつ大局的な人間の生き方を見せられるか——その描き方なのである。今回の作は、この文学賞にあつてそこに届いた希有な作品である。「アクリル板」（原浩一郎）は一言で言ってしまう、死刑囚との関わりの記録の小説化である。主人公は家庭裁判所の事件担当者調査官として約半年、その少年に濃密に交流をもったのである。少年の死刑は、妄想嫉妬の思いから意図的に親族を殺そうとした殺人未遂に加え、たまたま出会った「知らない男」から、殺してくれと頼まれて殺してしまったことが重なった結果によるらしい。

《多くの人には想像もできないほどに、彼は守られない存在であった》とある。そして、《審判法廷で彼は不貞腐れ、

メントしてみよう。囲碁についての戦中から戦後の話。その本因坊戦が昭和二十年八月六日広島市中島で行われる予定だった……すでにここに読者を惹き入れる何かがある。それは急遽五日市に移されて爆風のみですんだのだが、終戦間際にも碁を打ちつづける人間の執念と、それゆえに時代の激動を超えて生き延びる生命の逞しさの在り処に気づかされるのだ。

タイトルがいい。19×19の目の碁盤、ある意味でたったそれだけの世界。しかしそこには先ほど述べたような、時代を超えて繋がっていく人間の生命の開ける空間がある。呉清源という中国の天才少年を育てた瀬越八段の思いも鮮烈だ。かつて列強に乗っ取られ、また満州を奪われ、その後幾多の国難を経て世界第二位の経済大国にのし上がった中国。そんな現在にあつて、また「囲碁」という頭脳精神世界の隅に、共有し和し合える何かを求めないか……そんなタイムリーな小説でもある。

作者は、第八回歴史小説賞佳作、第九回歴史小説賞優秀賞、第十回歴史小説特別賞と着実に力を蓄えてきた。前回までは素材は抜群と思えても、文にどこか粗さを感じさせたりもしていた。今回は、その文がなにより読ませるものになっていて驚く。

もう一つ述べておこう。この作品はノンフィクションではない。作者が調べ想像力によって描いたものだと思う。

私に憎しみをぶつけた。その目が忘れられなかった。私は人の人生に関わることの恐ろしさを学び、善意にひそむ醜悪な利己心を身を以て思い知った。その六年後に退職したが、彼との体験を超えることも、その傷痕が癒えることもないまま、尾をひいていた」と。さらに《僕の方が、僕の方が、すまなかった、すまなかった》という主人公の詫びの涙になる。しかし、ラストで死刑になった相手が、「化けて出るわ」というかつての会話に《大歓迎だ》歓迎するよ》と、乗り越えられた心性が描かれて終る。これはサバイバースギルトに似て、関係した者の心の裂傷（外傷）にも思われる。それを主人公の側から徹底して描き、乗り越えに至ったことは感動に値する。

ただ期待されるのは、それからの主人公だ。トラウマを刻印された関わりのみならず、戦争を含めてさまざまな人間の凄まじい「関わり」における「修復の問題」。この視点にようやくこぎ着けた（内面での和解）主人公は、翻って次にどんな行為に賭けて行こうとしているのか。そこをも読みたい気がする。

以下は、小生の印象に残った作品についてコメントしていきたい。

「クーデター」（六藍光洋） ニジェルへの日本の経済支援、その通訳になった男から見た、現実のアフリカ世界。当時のアフリカ、植民地の事情が生々しく描かれている。

外交官にならなかつた（なれなかつた）からこそ、事実を見据えられる感性と目が生まれたのが分かる。ラストのクイーターは衝撃的で、外交上の善意や齟齬が一瞬にしてふつ飛んでしまう事実も迫力がある。内容の濃いノンフィクションとしても価値のある作品ではないかと思われる。

「ラスト・トゥデイ」（大島直次） 人生の辛苦を共にしてきた、ある種「戦友」とも言える親友との別れまで。評者が年齢もそれなりに近いせいとか、その感覚がよく伝わり、さらに男同士の友情を超えて、「いまここ」を生きてきた掛け替えない命の共有の感覚が、見事である。選考会では、最後に実際に旅へ出なければ面白くないという評が聞かれたが、これで十分ではないかと思われる。老いてきた二人が空間的に旅をするというのは、ある種ドラマだ。しかし、この主人公の二人は十分に同行した人生を送って来ているのではないか。敢えていえば、その二人の間にも何か亀裂、分かり得ないものもある——という人間の自立・孤立と尊厳の部分をも見せることだったか。私はこの作品が当選でも良かったとは思っている。

「捨て去る」（一色類） 捨ててきてしまった故郷、「実の母でない母」、ネコとのこと。文体は今回読んだ候補作の中で一番文学としての何かを感じさせるものではあった。

「実の母でない母」と繰り返し述べる部分や、不動産屋との対話、その他……独特な雰囲気がある。その文体をもつて盛り上げてほしい。

「妻恋い」（遠藤日暮） 妻に先立たれて生きる希望を失った男が水に溺れてしまう。しかし救助されて一命を取り留める。その後、助けてくれた若者たちへお札にいくシーンが面白い。ある種の出会いであり、相手はけっして人格者ではない、ただのうだつの上がらない青年だったりする命というものは、まず生きていくという最低の条件をクリアするからこそ、いろいろな感情を湧かせ得るのだと、さりげなく気づかせてくれるかのよう。ある種、命の「底着き体験」から得られた人間の生きる意味の表出としてなかなか読めた。

「シャガ」（脇田正） シャガという花は評者も知っているが、ここでは大人の悲恋を淡々と描いている。引用された詩と、いなくなった女がふつと現れるシーン、そこに描写は極まる。女が名家の出だったり、駆け落ちとか……は作られた感じ。

「揺らぐ照屋」（梶川洋一郎） 警察官だった主人公たちの思い出。殉戦者を出した場面などかなり重いが、どこか作者との距離が近いせいか逆に小説としての臨場感、面白みがいま一つという感じだった。

「裏街、もしくは、マーメイドの生成」（小林英実） スト

て、今後どのような作品を描いていくのか、楽しみではある。「封鎖海峡」（勢隆二） 戦後間もなく奄美大島へ帰還しようとした者たちの二重の悲劇。高潮による遭難と、密航として連れ戻されたという……。調べて書かれているとはいえ、遭難場面の描写の臨場感はかなりのものである。想像力のなせる技として評価しておきたい。

「父にあいたい」（浦上京子） 発想がなかなか良かった。性行為を経ないで出産したいという主人公。その後、生まれた命に対し、提供者は事故死してその祖父母が会いたいと必死になる。その思い、命というものへの視点がいい。性愛を描けなければ小説は成り立たない……なんて言われた男本位の視点は、性の快楽は本能としてあり続けるにしろ一つの分野にすぎなかったと思う。これは人間の命と存在の意味へ突き抜ける射程をもったテーマだ。

「絆歌」（大見佐耕） 老医師がビルマ戦線の戦友（患者）に再会し当時は思い出すとともに、その友情がテーマ。よく描かれていて感動もするが、史実にあいまいさがあるという指摘があった。

「命日」（河野つとむ） 冴えない定時制教師であった男の「ただの」女性関係、しかし後半思いのほか、人間が低い目線からよく描かれていて読めた。

「小さな昭和史『香椎会談』（森千恵子） 5・15や2・26事件に繋がる、その流れの発端の部分でルポ的に調べリップ劇場と、そのダンサーとの幻想的な生活。アニメという概念も出されユング的な思索の一例にはなった気はする。でももう少し人生を絡めてもよかったか。

「首輪」（竹内稔） この作品の魅力は、少年の動物に対する愛と、そしてミステリアスな展開だ。最後は、えつ、犬を喰ってしまったのだ！ という驚き。そこから何かが深まると、文学として読めるものになっていったと思える。人間の残酷さと生き延びる命の何か。

「ワニタンうどんはソマリア・レシビ」（大森康宏） ソマリアにうどんなの店を出すという発想と意欲は面白い。ただ、文にもう少し隠し味など入れてほしい、あるいは調味料。

空気を読まぬミノタウロス

都築隆広

自己推薦作が落ちることにかけては定評のある都築ですが、「なんとしても『天空に打つ』を当選させるぞ、ふんす！（かけ声）」と鼻息荒く、今年の選考会場である五十嵐編集長宅に乗り込んだのであります。



ところが、「天空に打つ」は予想以上に選考委員の支持

を集め、「アクリル板」も皆が褒め讃え、当選作二作で早々と選考会が終わり、乾杯とあいなりました。殴り合い寸前か？ という白熱の議論の末に当選作が決まった、エッセイ賞の選考会とは大変な違いであります。

碁打ちが主人公の沖方丁の「天地明察」や少年漫画の「ヒカルの碁」以上の囲碁知識はない私ですが、本因坊戦ぐらいは存じあげております。そんな本因坊戦が原爆投下前夜の広島で行われようとしていた、という「天空に打つ」の着眼点は秀逸でした。本因坊の名を争う名人達ともなれば、碁に命ぐらいいは平気で賭けられるはず。そんな勝負師達が戦時下の広島で、本当に命を賭けられたのか？ という命題。さらに、現在は喧嘩ばかりの日中間の友好もテーマに……と、このあたりの話は他の選考委員が書いてくださると思います。ぜひ、一読していただきたい当選作でした。

もう一つの当選作は「アクリル板」。対抗馬が「天空に打つ」でさえなければ、間違いなくトップ独走の作品であったはず。刑務所や死刑囚について書かれた応募作はたまにあるのですが、ここに描かれた死刑囚の「榊君」には妙な人間臭さがありました。誠実さとダメさの混沌が実に罪人っぽく、ああ、こういう人は出てきても駄目だろう。しかし、扉の中にある限りは善良であり続けるという皮肉が涙を誘います。無機質な「アクリル板」という題名も絶妙でした。

テイがないという批判もありましたが、サブライズがあつてよろしいじゃありませんか？ タイトルは少し平凡過ぎますけど。

ところで、今回の問題作は、佳作の「ミノタウロスの水辺」という作品でした。女子中学生を縄で縛ってエロスの限りを尽くす物語で、暴力の化身のような番長風の男と、彼を巡る少女達の関係が、クレタ島の迷路に棲む怪物、ミノタウロスと囚われの乙女達になぞらえられており、抜群のセンスを感じます。

とはいえ一読して、奨励賞以上は難しいだろうな、とも思いました。

コンクールにはその賞独自の雰囲気があり、他作品を凌駕できる力量が作者にあつても、表現が前例や常識から逸脱し過ぎると、受賞を逃すことがたまにあります。これを、「空気が読めない枠」と私は呼称しております。「ミノタウロス」もまさにそうした、才気とエネルギーを純粋にぶつけてしまった作品でした。

しかし、あの小林秀雄のデビュー作、「様々なる意匠」も懸賞論文では二席だったことは有名ですし、太宰治や村上春樹といった作家達も当初は賞レースで苦戦続きの「空気が読めない枠」だったのではないのでしょうか？ こうしたミノタウロスの破壊力を持った佳作も、上位に食い込んだ作品とは別に、なんとも応援したくなるような魅力を含

一方、河林賞と優秀賞二作は、どれも個性的な持ち味の作品ばかりです。「背信」は作中の町がステイヴン・キングのホラー小説に登場する田舎町のように閉鎖的で、些細な出来事にこだわり続ける人々の気持ち悪さが、私好みでした。「クーデター」はODAの内情を暴露している点が目白かったのですが、肝心のクーデター場面が少なかつたのが残念でした。「ワニタン」などはソマリア・レシビ」はどちらかというとエッセイ賞向きの作品。シニア層にあたる主人公が外国で頑張る点が審査員の平均評価を高めました。

個人的に気に入ったのは、歴史小説奨励賞の「水車」です。中国の石崇せきこうなる富豪について書かれたもので、深い人生訓があり、文章にも粗の少ない秀作でした。特に主人公の石崇が優秀な人物であるにも関わらず、性格が悪いところが読者を惹きつけます。ただ、何を原典にし、どのあたりが作者の創作で、どこが史実なのがわかりにくかつた点が残念です。せめて参考文献の一つも欲しいところ。

仰天したのは奨励賞の「再生」。ネタバレになるので詳細は語れないのですが、読んでいて完全に騙されました。最も巧妙に感じたのは、作中の「先生」なる人物が昔、住んでいた富山の家の地図を描いて主人公に見せる場面です。いかにも意味深なので、どんな伏線になるのだろうか？ と思っ読んでみると、あつと驚かされました。話にリアリ

んでいました。

空気が読めないということは、大物の予感なのですから。

選考を終えて

小浜清志



雨の降る夜だった。西新宿の中上健次事務所近くの居酒屋で私は初対面の男性と向き合っていた。彼の名前と合う理由は前もって聞かされていた。中上健次がとりあえず呑もう

と音頭を取り杯を交わしたが、彼は緊張しているのか唇をつけただけでほとんど飲んでいなかった。「こいつが昨年文学界新人賞をとった奴だ、参考になるか分からないけど話を聞いてよ」中上健次が煙草をはさんでいる指で私を指した。彼にとっては中上健次の話を聞きたくて雨の中を来訪したのであって、私の事などまったく興味がないという表情であったが、礼儀として心もち身体の向きを変えた。

私は、ショートホープに火をつけ天井に向かって煙を吐いた。十二社通りを行き交う車が水をはねているのが室内からも見えた。煙を吐きながら懸命に考えをまとめた。彼

の姿は二年前の私であった。文学を志してはみたものの何度も落選を繰り返して、たまたま出会った作家中上健次に未来を託すつもりで原稿をとどけたのである。その原稿は私も読んだが、筆力にまかせて書き進むタイプで、作品の熱が伝わらなかった。私の感想を聞くや、中上健次がそいつと会ってお前の思っていることを言ってみてやれと言われたのだった。

中上健次は梅干しの二つ入った焼酎を黙って呑んでいる。テーブルが三つの座敷とL字のカウンターには、私たち以外にまだ客はいなかった。出勤してきたパートの中年婦人が前掛けをしめながらカウンター奥の店主に挨拶をする。座敷の私たちへ視線を向けるが声はかけない。有名な作家という認識はあるが、彼女にとって作家イコール変態であるらしく意識的にかかわりを避けているふしがあった。私は、煙草を灰皿に置きなり彼の目をしっかりと見た。彼は威圧されたのか目をそらした。私は、その瞬間に彼は賞を獲れないと確信した。「はつきり言って筆力は認めますが、作品から放たれる熱が薄いように感じました。これまで何度か文学界の二次まで行かれたそうですが、私が思うにそのことが飛躍の芽をつみとっていると思います。」「それはどういふことですか？」彼の表情に色がでてきた。中上健次も身をのりだしてきた。私は、彼がいきなり殴ってきてよければ距離を確認しながら言葉をつないだ。「書

く作業は誰でも辛いものです。楽しいと思うことなど皆無です。書きあげる作品をどのレベルまでもつていくのか。それが新人の斗いだと思います。しかし、あなたは書きあげたとき、まあ、一次は行くだろうと安心していませんか。私もそんな経験はあります。ですが、もう一段登るためには、もっとバーを上げてみようという挑戦が必要です。それを失っては、からが破れないと思います。私は中上健次に読んでもらえると思ったときから確実にレベルがあがりました。失礼ですが、あなたの作品は以前のものと今回はあまり変化がないのではありませんか」彼の表情から勢いが失せていた。私は、漠然と想像していたことが彼と話をしている現実のものになったと思った。

多分、仲間うちで彼は抜きこんでいる存在であろう。文学界二次として名前が公表される訳であるから誰もその実力を否定できない。そして、彼の胸にも自信と誇りが生じることになり、書きながら選者を意識したこともあっただろう。そのおごりが、作品に住みつかなくはならない書き手の熱を追い出している。気がつく私は中上健次に制止されるまでそのような趣旨を喋りつづけていた。「まあ、こいつの言うことも一理はあるが、また書くことだな」結局彼は私の感想を聞かされただけで席を立ってしまった。そして、それ以降顔を出すこともなく、投稿の形跡もなかった。

なぜ、このようなエピソードを持ち出したかと言えば、

今回で十一回目となる銀華文学賞の応募作品にあの時の彼と同じような状態で書きあげたであろうと推測される作品が幾つかあったからである。作品は書き手の意識でしか書けないのは当然であるが、最高のレベルのものを書こうと目標を決めれば飛躍的にのびると思つたのは「封鎖海峡」「クーデター」「ワンタンうどん」はソマリヤレシピ「首輪」「ガラスの檻」であった。素材の良さを活かすきれいなものが非常に残念だった。視点を変えたり、構成に時間をかけたりすればどれもが当選圏内に入れたのにと悔やむ。「封鎖海峡」の歴史的背景の重さ、嵐にほんろうされる船の描写には圧倒されたが、全体をつらぬく主旋律が聞こえてこなかったのが淋しかった。

「クーデター」は海外の経済援助を巡るトラブルを基調にしていて作品の底流に見えるテーマの重さは理解できるのがあるが、作者の息づかいを感じる事ができなかった。「ワンタンうどん……」は海外に日本のうどん屋を展開する話で、これも「クーデター」同様に国の違いを見せつけてはくれるが、話の軽快なテンポをテーマへとうまく結びつけられなかった。しかし心に残る作品である。

「首輪」は愛犬のダン吉が戦争末期になくなった謎を追いかけていく話である。私も似たような体験があるので他人事には思えず引き込まれて読んだ。構成をもう少し考慮

すれば良質な作品に変身できたであろう。

「ガラスの檻」は戦争という怪物に食い荒らされた日中間係を取材という形で作品にしているが、このような作品は巷にあふれていて切り口の斬新さがなければ読み手はあまり感動しないであろう。

さて、当選作となった「アクリル板」は、死刑囚との交流を描いた人間の悲しみが文面からあふれていた。主人公の生活を入れていればなお濃度が増したと思うが、この作者はもっと書ける人だと信じる。

「天空に打つ」は私はノンフィクションだとして小説としての点数は低かったが、良質な作品であることに変わりはない。この作者は冒頭に書いた彼と同じくどこかで見切りをつけているような気がする。もっと力を出せる人である。このレベルで満足せずに書いて欲しいし、書ける人である。銀華文学賞出身の作者はプロの作者になれると期待している。今年も数多くの作品に触れさせて頂いたが、文学の勢いは少しもおとろえていないし、その潮流はますます広がっていくであろう。



文芸思潮銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・

授賞式&祝賀会・懇親会

イラスト・漫画賞・まほろば賞

読者の皆様、今年も「文芸思潮」銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・イラスト漫画賞・まほろば賞の授賞式および祝賀会・懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できる楽しい文学の集いです。創作への熱い思いを交わしましょう。どうぞご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時●平成二十七年二月十五日(日)

授賞式午後二時/祝賀会・懇親会五時半

会場●東京都大田区民プラザ地下小ホール

東京都大田区下丸子三・一・三

TEL03・3750・1611

※東急・多摩川線「下丸子」駅前

会費・飲食費●授賞式無料、祝賀会一人五千円

問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮

TEL03・三五七〇六・七八四七五十嵐まで

または090-8171-9771まで



選考会風景

銀華文学賞選考委員プロフィール

大高雅博

おおたか まさひろ

1954 石川県生まれ 日大国文学科卒
80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥー・リメンバー」など

都築隆広

つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ 東海大文学部卒
2000「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞「狼を見る」(「文芸思潮」)「ハンコの町の鰻がいる家」(「三田文学」)他
短編映画「ウミズメシ」脚本(吉本興業・宮崎県門川町製作)他、放送作家としても活動中

八覚正大

はっかく まさひろ

1952 東京生まれ
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒
91「十二階」で新潮新人賞受賞 文芸学校・NHK 学園講師 主著『「シェルター」発』(けやき出版)『夜光の時計』(新読書社)詩集『朝一の獲物』『学校のオゾン』(共に洪水企画)

小浜清志

こはま きよし

1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務める
88「風の河」で文学界新人賞を受賞

五十嵐勉

いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒
79「流滴の島」で群像新人長編小説賞受賞
84-90 タイ在住、カンボジア問題取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長
主著『緑の手紙』(インターネット文芸新人賞)・『鉄の光』『ノンチャン、NONGCHAN / 聖丘寺院へ』

作家集団「塊」新メンバー募集中

小説集
「シェルター」発
八覚正大

学校現場のリアルを
生きぬくために
どうしても文学が必要だ

火の闇
小浜清志

姉の墓方が、
神を呼び寄せろ
沖縄・八重山の
洋上には浮き輪、
小さな島を舞う、
新田みづの時代の
人々の魂を代刺し
狂気の新風、
期待の新興、
第一作集出版

炸裂する南の島の闇の光、
耳にごたまる
サンジンの調べ……

聖なる地は、
汚されたか？

集英社 定価1800円(本体1748円)

天空に打つ

活きと死。それ死活なり

工藤辰吾

「渋谷からも国会議事堂が見えましたよ」

東西の道は、崩れた建物や瓦礫が広がり、埃が風に舞っている。首の汗を拭き拭き岩本薫七段がいった。岩本は黒の柿の木坂から駆けつけてきたのだ。

「海軍省も参謀本部も外務省も、……御所も燃えましたな」
岩本が唇の線を歪ませた。

「やられましたな」

瀬越憲作八段の大きな口が開いた。

赤坂溜池の日本棋院本部の焼け跡を見ながら、瀬越は不思議に落ち着いていた。五月の東京は焼け野原だらけであった。昭和二十年三月十日の東京大空襲よりさらに大規模な空襲であった。五月二十四日、B29爆撃機五二五機が麹町、麻布に、二十五日には四六九機が中野、四谷方面に爆弾の雨を降らした。それは東京をすべて廃墟にするべ

く練られたアメリカの恐るべき皆殺し戦術であった。三月、

五月の空襲で東京市街の半分が消失したのである。破壊された建物から印半纏をまとい戦闘帽を被った中年の男たちが手になややら掴んでこちらに向かって来た。男たちは、後片付けに駆けつけた麹町の消防団員たちであった。いづれの顔にも煤が付いて、

「こいつがなにやら食っているの殺しました」

二人には、男が手にしているのは死んだ子犬であることが分かった。

「死体を喰らってしまつて狂犬になるらしいですからね」

消防団の一人がいった。

そんな話を聞いた覚えがあると瀬越は思ったが、別の男が、書庫が焼けたことを告げた。

「いけませんな。大事な棋譜も焼けたのでは」 岩本は顔を

しますが、ご協力ください」

瀬越さんは狂った、と岩本は思った。東京が、いや、全国の一部が焼野原となり、本土決戦が叫ばれている折に、本因坊戦を口にしたものだろうか。

「囲碁界からみれば、戦争や内乱で中止というものではないのですよ」

棋界の重鎮としての顔が覗いていた。

「先達さんらは、戦の合い間に囲碁を打っていたのではありません。囲碁の合い間に戦をしていたのです。本因坊算砂は、信長、秀吉、家康の囲碁の師でした。今は軍人さんがわたしらの生徒です。どうです、生徒に本因坊の棋譜を見せる気はないですか」

「軍人さんに棋譜を見せて、徹底抗戦を示すのですか」

瀬越の長い顔が、突然ゆらゆらと揺れた。特徴の大きな口が開いて、

「それもよろしい。どう打つかは打ち手次第です。あなたの思いは必ず棋譜に現れます。ではさいなら」

瀬越はまるで近所に寄つたような口調で岩本に背を向けて歩き始めた。しかも着物姿であることも岩本は初めて気づいた。戦局厳しいなかで、着物姿で表を歩くことは勇気がいるが、軍人に軍服があるように、棋士にも制服がある。それが瀬越の着物なのだろう。

「さて、日本にどの一手がありますやら」
瀬越は言つて辺りを見渡した。焼けた家が遠くまで続き、炭化した幾本もの電信柱がまるで塔婆のごとく建つて、焼け残りの煙が立ち昇っているのはお供えの線香にも見える。空は煙を溶かしたような鉛色が覆っていた。
「ところで、本因坊戦はどうしますか」
瀬越がいった。
「どうしますかといつても……」
岩本は呆れた。日本棋院の建物が燃えてしまったばかりである。
瀬越は明治二十二年生まれの、五十六歳、岩本は明治三十五年生まれの四十三歳であった。瀬越は大財閥大倉喜七郎の後援を受けて日本棋院の設立に貢献している。「方円社」「神聖会」「本因坊」各派を集結したものである。喜七郎は大倉財閥の二代目で、多趣味で知られ、音楽、舞踊、絵画、ゴルフ、カーレース、囲碁に後援している。一九二四年に日本棋院が創設され、一九二六年に赤坂溜池に鉄筋コンクリート二階建ての会館を自費で完成させた。ドイツにおける囲碁の普及には、福田正義五段を昭和十二年から派遣した（昭和十六年まで滞在）。喜七郎は日本棋院副総裁となっている。
「わたしに考えがあります。岩本さんにはご苦労をおかけ

瀬越憲作は広島県能美村（現広島県江田島）出身である。大正十五年に七段に昇進し、本因坊秀哉に連勝し、定先の手合とした。下手が黒石を、上手が白石を持ち、先手有利の黒石にたいして、常にハンデをもつ手合割りである。瀬越は、大正十一年に「禪聖会」を作り現在の勝負方式である時間制、総て互い先で打つ試合形式を作ったのである。毎日新聞が本因坊名跡の権利を五万円で購入、日本初の新聞社主催としたのが、昭和十四年に始まった「第一回本因坊名跡争奪全日本選手手合」である。

「格式のある本因坊戦を紙面に掲載すれば、多くの読者を獲得するはずである。全国の碁好きの人々は、争って貴紙を買ってくれる」

瀬越は毎日新聞を口説いて本因坊名跡の権利を買わせたのである。棋士は高額の対局料を取り、優勝すればさらにタイトル料金が入るようにする（現在は三千二百万円。最も高額なのは棋聖戦で四千五百万円）。棋士の生活にも貢献するはずで、旧態依然の本因坊派ではこの試みはできない。

昭和十四年六月十二日、日本棋院会館において本因坊継承戦のための選手権であることが本因坊秀哉と門下一同の声明書が読まれた。参加棋士は、プロ五段以上、但し第一期のみ四段の上位者が参加できるとした。トーナメント方式で、四段、五段、六段各級のトーナメントを行い、勝ち

「岩本六段と小杉四段を負かしたという十二歳の少年です
ね」

「そつだ、今は十四歳になる。呉は二人に三勝一敗だ。昨
年の井上五段とは一勝一敗だった」

藍色の単衣の着物を羽織って、そのうえに綿が入った丹前を着た瀬越は、呉清源に執着していることを隠さない。呉を日本に呼びたい。しかし、習慣も違う少年を大人の思惑だけで連れてくることには慎重のうえにも慎重であるべきだと、瀬越が言うのは、日本棋界の抵抗を予想していたからである。永く格式のある本因坊派が中国人である呉を日本棋界に迎えることは容易なことではなかったからである。すでに日本の新聞社が、「秀策の再来」と騒いでいる。昨年の昭和二年、四谷信濃町の衆議院議員犬養毅の邸を瀬越憲作と、方円社社長の岩佐銈が訪れた。

「この度支那で棋道の天才少年を見つけました。呉清源という少年で、棋聖秀策の少年時代に似たような天稟の棋力を持っています。少年の打った棋譜を三局ばかり調べてみました。その天分の豊かなこと、驚くような次第です」

「ほう、それは耳寄りな話だな」犬養木堂は、政界では有名な棋家である。

「その少年を日本に呼び寄せみっちり仕込んで物にしたい
と思います。向こうの親たちに安心させるためには、有力
な後ろ盾が必要でございます。そこで、北京の芳沢大使に

抜き者と七段による最終トーナメントを行う。持ち時間は各十一時間。コミは四目半。

第一期「本因坊戦」の注目の的は呉清源である。呉の後見人として瀬越が昭和三年に中国から呼び寄せたのである。この時、呉の試験碁に向かわせられたのが、十五歳で、地方新聞連盟主催の大会で七人抜き、青年囲碁争覇戦で五人抜き、東京日日新聞主催の方円社特選敗退碁戦では八人抜きを成し遂げ、雑誌主催や新聞社主催の勝ち抜き戦で「天才宇太郎」と呼ばれた橋本である。橋本と碁の関わりは以外と遅かった。大阪市天満北区の紙屋に生まれた宇太郎は、九歳の時に近くの碁会所に遊びに行ったことから始まる。

「どうや、おもしろいでえ」

碁会所のオヤジがなげなく誘ったことから棋士の道に入るのである。碁会所に出入りしている人の紹介で久保松門下に入った。久保松とはわずか二年の修行であったが、「強くなるには東京にゆけ」

師匠の久保松の温情であった。十三歳で東京の瀬越門下に入る。

橋本宇太郎二十一歳の時、師匠の瀬越が呼んで、呉の試験碁を命じた。縁側から涼しい風が流れ、高い木々の梢が揺れている。日が落ちた辺りの屋根に黒い墨が染みはじめていた。

「呉清源の名は知っているな」宇太郎は頷いた。

お願いして、芳沢大使から、少年の親御に修行の勧誘をいただいたらと思ひまして」

「それはよいが、果たしてものになるか」

芳沢は木堂の女婿である。木堂はひげ面の顔から意地悪
そうな目を覗かせて、

「その少年がめきめき育つたら、結局将来は貴公らがや
れる時代がくる。日本の棋界が中国の少年におさえられた
とあつてはどんなものかな」

「いいえ、芸道には国境はございません。世界のどの国が
名人上手になったところで、私らは、大いに歓迎したいと
思っています」瀬越が応えると、木堂は膝を打って、

「ええ覚悟じゃ、技芸に携わる人は常にその精神を持つちよ
らにゃいかん。それでこそ、芸の道は発達するのじゃ」

瀬越は、呉少年がもつ天性の才を伸ばし、棋界を驚かせ
るような棋士に育てあげる決心であった。しかし、どこか
迷いもあり、何か踏み切れないのだ。それが何なのか……
高弟の宇太郎の読みに従うつもりであった。呉の総てを碁
盤で読み取り、棋士に必要な品格も見定めるよう命じた。
昭和三年のこの時期、中国と日本との間がキナ臭い関係に
なり、五月、山東省済南で国民軍と武力衝突した。六月に
は奉天において奉天軍閥の張作霖爆死事件が発生した。北
京に着いた宇太郎は、伴侶を亡くした母と兄を日本に連れ
て行くことが、呉の条件であることを確認した。日本領事

館から瀬越に連絡が入り、

「日本に連れてくることに内諾を得」と知らせてきた。

瀬越が危惧していた呉の不安が解消したことで、瀬越は、宇太郎に、試験碁を打たせた。昭和三年九月四日のことである。現在、プロ棋士になるには、日本棋院、関西棋院の院生になる必要がある。院生になるには、十四歳未満でアマ六段の腕があり、棋譜三枚を提出しプロ棋士と囲碁を打つことになる。院生になっても、十八歳までに四つのクラスでリーグに勝ち抜いて二十四名しか残れない。夏試験ではプロになるの是一名、冬試験では二名という狭い門である。宇太郎四段は碁盤を見て驚いた。碁盤は木製ではなく白い布の碁盤であった。宇太郎は呉に二敗した。

「先生は君の才能を伸ばしたいと考えていらっしやる。日本に来るべきだ」

北京の街は、呉が日本人に勝利したことに溜飲を下げたのが、同時に呉が日本に行くことは中国の至宝を日本に持ち去られることを意味する。生活のために日本に身を売ったという責めを呉少年は受けることになるのだが、瀬越が恐れた障害はそのことであった。

母と兄を伴って日本に来た呉少年の売り出しのため、師匠である瀬越が忙殺されると、宇太郎は呉の名前に隠れる存在になったように思った。瀬越の高弟である宇太郎の手合を観るより呉の手合を世間は観たがるのだ。宇太郎は

内心おもしろくはない。

呉清源の来日は、日中友好作りには格好の材料であった。昭和三年十月十八日、天津から門司港に着いたばかりの十四歳の呉清源少年は、東京駅に着くなり瀬越宅に向かい、住み着いてしまった。瀬越はやむなく気持ちだけの師匠と弟子ということにして、世間には公表しないでおいただけであった。

十二月一日、三日、七日と日本棋院で段位を決める試験碁が行われた。法因坊秀哉名人（当時五十四歳）に勝ち、宇太郎とともに棋院三羽鳥と呼ばれた篠原正美（当時二十四歳）、久保松門下の村島義勝四段（当時二十三歳）、同じく久保松門下の前田陳爾四段（当時二十一歳）らを次々に負かした。呉少年は三段を許され、日本棋界の一員として正式に認められたのである。まさに彗星のごとく現れた少年は、天性の打ち手を見せたのである。瀬越は自分が北京から手合いの招待を受けながら、試験碁を宇太郎に打たせたことを問われ、

「もし七段のわしが負けたら、呉は日本の棋界の実力に疑問を持つであろう。段のない呉には三子を置いて打つことになるが、二子でもわしは勝つ自信がなかった」と、正直に吐露した。

昭和八年、読売新聞主催の「日本囲碁選手権手合」で十六人のトーナメントで勝ち抜いた呉清源と兄弟子橋本宇

太郎の何れかが、日本棋界の第一人者本因坊秀哉名人との一番勝負を挑む権利を得ることになった。読売新聞が呉清源と秀哉名人との対戦を望んでいる気分は紙面から伝わるだけに、宇太郎は負けるわけにはいかない。

「どちらが勝ちますか」

読売新聞の正力松太郎社長は会社の売上がかかっているだけに、瀬越を捉まえては予想を聞きたくない。その度に正力には瀬越の長い顔がさらに長く見えた。

「え！どっちですか！瀬越の口からズバリ」呉「だといっでもらいたいのだ。」

瀬越の閉じられた口がバクリと大きく割れて、出た言葉は「どっちでもわしには可愛い弟子ですから」だった。

橋本宇太郎は呉清源に負けた。正力松太郎社長は、注目の呉清源がトーナメントに残ることを期待していたので、顔をクシヤクシヤにして、

「負けましたか、そりゃありがと。よくやった」と宇太郎の手を握って礼をいった。

読売新聞の企画は当たり、紙数が倍になったという。昭和八年十月十六日に始まった秀哉名人五十九歳と十九歳の呉清源五段の戦いが始まる。全国の国民が注目する大一番であった。持ち時間各々二十四時間であるから、二人合わせて四十八時間。一日八時間打つとして連続打って六日間ともなる。大方の予想では一週間に一度の割合で打ち継い

でも一ヶ月で終わるだろうと読んでいた。東京、京橋の鍛冶橋旅館で二人は向き合った。呉は二先二・先番である。呉は三々と打ち、秀哉名人は旧布石に打った。呉は、星に、さらに、碁盤の中心である天元に打った。アッ！観戦者は驚いた。呉の布陣は斜め一直線に布いたのである。このような布陣を見たこともないから、読者は騒いだ。次に秀哉名人はどこに打つかと興味はいやがうえにも盛り上がった。名人は三々の肩を衝いた。だが、呉の一手目三々は激しい抗議を招いたのである。「坊門の鬼門」と呼ばれ、本因坊派の弟子はもとより、読者から抗議の手紙が盛んに舞い込み、さらには呉の自宅に石が投げ込まれたりした。曰く、「名人に無礼なふるまいではないか、陰陽道では忌み嫌う鬼の出入り口の方角である。その方角にこともあろうに名人に対して云々……」

ついには対局の控え室に名人の門下が話掛け、その圧力に呉清源はたまらず、

「先生（瀬越）に同道していただけませんか」

と叫んだほどであった。瀬越は、弟子の吉田操子四段に命じて、介添えさせた。支那との関係も悪化し、呉の対局を不満視する者もいたのである。対局は秀哉の打ち掛け（中断）により、年が変わった昭和九年一月十五日、呉の優勢で名人の十二回目の打ち掛けとなった。この日はわずか四手が進行しただけである。打ち掛けは黒の呉が打った後に

行われた。本来は白が打って打ち掛けなのだが、封じ手の制度が確立されていないため、名人が「これまで」といえばそれで打ち掛けとなったのである。

一週間後の一月二十二日、秀哉名人は二十四手目で十三回目の打ち掛けとなった。問題はその後、瀬越が理事長辞任となる舌下事件の裏事情へと布石が打たれるのである。この十三回目の打ち掛けで、秀哉名人の弟子前田某が次の一手を師匠に助言したというのである。真相は不明であるが、度重なる打ち掛けにより呉の不利はあきらかであろう。およそ三ヵ月後の一月二十九日、秀哉名人の白二目勝ちとなった。

第一期「本因坊戦」は、六段級トーナメントに参加した広瀬平次郎六段の門下岩本薫六段、瀬越門下の橋本宇太郎五段はともに破れ、最終トーナメントの第一次戦では、瀬越謙作七段は関山利一六段に敗れた。関山はこの時三十歳で前年には無敵の呉清源に勝つて十九連勝を止めた棋士である。第一次戦では呉清源が優勝、第二次戦では関山利一、第三次戦では木谷實、第四次戦では呉清源が優勝したが、総得点一位の関利一六段と第二位の加藤信七段との対戦が昭和十六年二月四日から始まった。持ち時間十三時間、三日打ち切りで、コミ無しである。七月十八日までの決勝六番勝負を行い、先番勝ちの三勝三敗の引き分けとなったが、勝敗は予選成績上位の関山利一が優勝、本因坊利仙と

号した。

「なんともケツタイなトーナメントですわ」

呉の兄弟子にあたる宇太郎が指摘するまでもなく、呉はトーナメントで二回優勝し、しかも二回関山を破っているのに得点差で決定戦に出れないことを指している。呉清源は、戦中、戦後も囲碁界のタイトルを取ることはなかった。

第二期の本因坊戦は昭和十六年から始まり、決着は昭和十八年七月まで続いた。このトーナメントには橋本宇太郎の師久保松勝喜代が出場した。久保松七段は明治二十七年生まれの四十七歳であった。尼崎で生まれ、父に教わったが、六歳で父を亡くし伯父に育てられた。特定の師匠はなく独学で学んだという。才能はすでに注目され、二十歳のときに石井千治棋士に認められ、飛び三段を得る。神戸から上京し、東京の呉清源に勝ち、昭和十一年には第二回日本囲碁選手権に優勝し、第一回本因坊戦では、最終トーナメントに出場した実力者であった。東京の瀬越門下に橋本を送り出したのは、久保松の広い心の証左であろう。何十名という棋士を育て、囲碁の研究会を大いに開いた人といわれている。宇太郎は久保松の具合が悪いと聞いていたので、自宅を訪ねると、大柄の身体をひどく小さくさせていた。驚いた宇太郎は、

「先生、どこが悪いんですか、医者に診てもらっているん

ですか」

と近寄って尋ねた。久保松は、青い顔をして首を振った。「大事な、大事な」

といった。久保松は我が子供を見るように、今度の大会ではお前と打つのが楽しみだ、こんな果報なことはないといった。

「いいか、大会が近づいているから、くれぐれも世間から疑われることはないかん。お前は俺の門弟であっても、これからは碁敵だ。暫しの間、出入りは禁止だ、分かったな」

橋本は師の気持ちが高いほど分かった。神戸時代、東京に移っても、師匠の暖かい指導がなければ今の自分はないと思っている。しかし、棋士になった以上、親の死目に会えないことも、師の身体も気遣うことはできない。

「では、ご無沙汰いたしますが、くれぐれもご自愛下さいませ」

宇太郎に嫌な感が働いたのは、棋士の研ぎ澄まされた質感であったろう。夜の道を歩きながら、ぬぐつてもぬぐつても涙が出てきた。何の涙か宇太郎は分からなかった。

天才の呉清源だが、本因坊には縁がない。第一期本因坊戦では、四次トーナメントに二回優勝したが、合計得点三位で、決勝戦には挑めなかったのである。第二期本因坊戦に当然勝ち残るものとおもっていた囲碁ファンは、呉清源の名がないのに驚いた。第一回トーナメントでは、入院先

の慶応病院で久保松勝喜代七段が宇太郎を打ち負かして一位、第二回では木谷實七段、第三回は篠原正美五段が残った。ところが、久保松が急死、久保松に敗れた準優勝者橋本宇太郎が、師匠の久保松のリーグに出席することになった。最終リーグでは二勝同士の木谷と宇太郎の対戦が行われ、宇太郎が挑戦権を得た。

昭和十八年四月、久保松の三回忌がしめやかに棋院仲間で行われた。この年一月に東京日日新聞が統制のため毎日新聞に統一された。南の島では二月ガダルカナル撤退、四月山本五十六連合艦隊長官戦死、国内では薪、木炭が配給制となった。

「いよいよだな」

顔の長い瀬越が、宇太郎に声をかけた。棋院の中は、静かであった。「天才宇太郎」「火の玉宇太郎」のニックネームは、橋本の激しい攻め方をも表している。本因坊の名跡まですぐのところまで来ている。

「世間の声は聞くんじゃない」

瀬越は、温くなった茶を一口に飲み干した。桜の花びらは川に流れ、今は青々とした葉が茂っている。その景色は見慣れたようでもあり、真新しい感動を隠している季節であった。

「先生、わたしは挑戦者に相応しくないのでしょいか」

「またそれをいう。おまえさんは立派な挑戦者だ。久保松さんも応援しているじゃないか。何を恥じることがある。なるほど、世間では呉が出ないことを訝しく思うかもしれない。呉清源が挑戦者に相応しいと。日本棋院は不正だというやからもいることは知っている……だが、呉は負けたのだ。勝負は時の運である。お前は勝ち、そして本因坊関山利仙と対戦する、それだけではないか」

宇太郎は胃に故障を持ち、さらに神経が細い。いらぬ声が聞こえるのだろうか。確かに十一歳で日本棋院院生となった藤沢庫之助は、呉清源と十番碁を対戦し、たちまち囲碁界最強といわれたが、(七局目まで三勝四敗の劣勢であったのが三連勝して六勝四敗となって、呉の唯一の負け越しとなった。昭和十九年八月まで続く)

「今の呉は精神が病んでいる。次兄の呉炎の紹介で入信した紅中会や、中国に帰国した母や妹が心配だろうに。中国人から呉は裏切者と呼ばれているそうではないか」

瀬越は、宗教に走り碁を辞めると言い出すまでになった呉が哀れであった。

「南京市内では呉の首に懸賞金がかけられている看板を見ました」

宇太郎は悲しげにいった。

「今の呉に昔の気迫はないのだ。碁盤に命を吹き込める者だけが勝てるのだ。宇太郎、気迫にまさる自信はない。気

迫こそ我が命であると心得よ」

呉清源は、中国人にとつては国を捨てた恩知らずであり、日本人にとつては超えられない嫉妬の壁である。だが瀬越からみれば囲碁の世界は無敵であり、国の数ほどさらに才能のある人間が存在するのである。

(先生は読売新聞に協力的過ぎるという話あり、呉を使うだけ使う吉本芸能と呼ばれているのをご存知か)

宇太郎は、心の中で叫んでいた。

第一期本因坊戦が戦われているさなか、読売新聞の正力松太郎は瀬越と契約し、「呉清源打ち込み十番碁」を開始した。日本棋院が財政難のため承諾したとしても、本因坊戦とはほぼ同じ時期にはじめ、同じ時期に終わらせたのは、やりすぎであろうと、宇太郎には見える。「呉清源打ち込み十番碁」は、呉清源七段と木谷實七段との勝負であった。本因坊戦に進めなかった呉と木谷の過去の対戦は、昭和九年の第一次十番碁戦では引き分けて、第二次戦を待ち望む声を正力は強調したのであった。昭和十四年九月二十八日に始まり、昭和十六年六月六日に呉の六勝四敗で終了した。読売新聞がこの対戦を騒ぎ立て、購読者が増えたのである。「今、生活のできる棋士はどれほどいるであろうか」瀬越は言う。

宇太郎は、内心を見透かされた思いで瀬越を見た。

「戦争が始まり、育成した生徒は、十九歳で徴兵にとられ

てしまう。わたしの所でも、すでに六名が、取られてしまっ

た。仕方ないことだが、九歳、十歳、十一歳で修行に来ても、よほど身体が弱くなければ残れない。呉が徴兵を免れたのは結核の故だが、日本棋院は、徴兵を忌避しているという声は聞きたくない。また、中堅の棋士も徴兵され、手

合いが成り立たない。囲碁戦にスポンサーがつかなければ、たちまち生活に窮する。慰問団を満州に派遣して、かろう

じて飢えを凌ぐ有様だ。日本棋院を守るために、何でもしようと思ふ。君が不満とするところは、わたしにも分かる。

呉と十番勝負したいだろう。だが今君がすべきことは、本因坊利仙に勝つことだ」

第二期本因坊戦の間に、読売新聞は昭和十六年八月から、

「呉清源・雁金順一打ち込み十番碁」(呉の四勝一敗)、昭和十七年十二月から「呉清源・藤沢庫之助打ち込み十番碁」を開始したのである。

宇太郎は、師匠の久保松が死去したためにリーグ戦に参加、本因坊への挑戦権を得たのである。持ち時間各十三時間の第一局で宇太郎が勝つと、関山の健康があまりに悪いことが分かった。しかし関山は病気を押しして碁盤に向かった。第二局は七月七、八、九日と行われ、三日目に八九手を打ったところで、ついに関山は倒れ入院してしまった。宇太郎は九十手を打って打ち掛け(中断)とした。関山の

弟子梶原武雄が代理碁を打つ案も出たが、九月七日、橋本宇太郎は、正式に第二期本因坊戦の勝者となり、本因坊昭宇と号した。宇太郎は病者から本因坊を奪ったように言われたこともあり、瀬越は動いた。

「毎日新聞が記念手合いを設けてくれた」

瀬越が伝えると、宇太郎は心の中が激しく動いた。興奮を抑えるように、

「ありがとうございます」

畳に頭をつけた。

棚からぼた餅のごとく、新聞紙上でからかわれた宇太郎であった。師匠の代理で挑戦権を得たことや、関山利仙が辞退したために本因坊となったことや、さらに試験碁で呉清源に負けたことが世間の記憶に残っている。本因坊就任式の当日に長女の葬式を出すという厄災は本因坊の怨念と囁かれた。

「藤沢庫之助六段に勝てば、呉との対戦も許す」

瀬越がきっぱりといった。まずは藤沢である。藤沢はこの時二十四歳、棋風は力戦派で「ダンブカー級の突進力」と評された。宇太郎は三十六歳である。

本因坊就任記念手合として毎日新聞主催の藤沢庫之助と橋本宇太郎の二番碁が行われた。結果は一勝一敗であった。ついに呉との三番碁が中部日本新聞の主催で、厳冬の十二月に日本棋院で行われることになった。瀬越の読みは、

中盤から終盤までは、宇太郎が呉の棋力を押さえるか、模様（大まかに囲っている地域）に打ち込んで生きるか、模様に入力して地模様にするかだが、おそらく呉は、させないであろう、良く引き分けと読んだ瀬越であったが、対局中、呉は寒さに震えて火鉢に新聞紙を投げ入れた。宇太郎は無駄なことだと思いが、呉が投げ込む度に火が燃え上がるのをおかしくもあり、悲しくも思えた。宇太郎の二勝一引き分けであった（コミなしのために起こる勝負である）。呉の棋力は失われ、宇太郎が感じていた怖さが消えている。

瀬越は、呉の心情を宇太郎に伝えた。

「呉は帰化して以来、同じ故郷の蒋介石に申し訳ないと思っている。蒋介石は皇軍に追われ日本に征服されるという見方が大勢である。呉は碁盤上で日本と戦うと洩らしているらしい。それはいい。勝負師としてその気概は大事である。だが、蒋介石が負ければ、その分呉が勝てる訳でもない。故郷が減んで憎しみの碁を打つには精神の限りがある。呉は、日本の棋界を征服して凱歌を揚げて故郷中国へ帰る日を確信しているという。その日が来るまで、隠忍自重して、最後に溜飲を下げたい」と

宇太郎は、勝負は何かと思う。勝つ者が得る栄冠がある。しかし勝利に永劫はなく、暫しの間瞬くだけである。呉に勝利しても少しも喜びは湧かない。宇太郎は、東京を離れ

岩本は若気のいたりといっているが、妻の病氣や残した母や長男のこともあり、二十六歳で日本に戻った岩本は、碁で家族を養わなければならないと決意、十二年の歳月を経て七段に昇進した。派手さのない地味な碁打である。中盤の戦いに強く、特徴として序盤は散在する石がつかって相手に圧力をかけることから「豆まき碁」と呼ばれている。岩本は、本因坊挑戦者としては、瀬越に任せるしかないと思う。橋本は瀬越門下だから、嫌とはいわないだろうが、一局に三日を要するため、この空襲下に本因坊戦の大局にふさわしい場所が、日本にあるのだろうか。汽車、宿や、食料、記録係りの手配など複雑な事務を瀬越一人で行わだろうか。徴兵年齢が一年引き下げられ、学徒動員が行われた。木谷實、藤沢庫之助、坂田栄男、高川秀格など若手棋士たちが戦場に、教育召集で戦闘の訓練に、軍需工場に徴用されているのだ。今や、碁盤に向かって対決しても新聞に報道されることもない。対局料を得たとしても、紙幣は価値がない。

「あんさんは酒がお好きな人だから、うまいものと酒だけはたっぷり用意させますから、東京におけるより気楽です」瀬越の誘いに乗ったのは、岩本の酒好きだからだが、宇太郎の立場を考えると、むりやり誘い出された思いなのではないかと、同情する気持ちになる。

おっとりとした岩本が、瀬越から、広島の前局場所が定

ることにした。西萩窪の家を売り払い、郷里の宝塚に戻ることに決めたのである。

日本棋院が焼けて、仮事務所を岩本の自宅である目黒の柿木坂に据えると、瀬越は郷里の広島に戻り対局場所を捜し始めた。

三期本因坊戦は、昭和十八年七月から勝ち抜き戦が始まり、五段級予選では六名のうち、中村勇太郎、鍋島一郎、坂田栄男が勝ち抜き、六段級予選で、六名が勝ち残り、七段予選で岩本薫、藤沢庫之助、高川格、村島諒紀、中村勇太郎の五名が残った。新たに八段位に推薦された、瀬越憲作、呉清源、加藤信、木谷實を加えた九名による各人四局のリーグ戦を行った。挑戦者決定リーグに残ったのは岩本薫、藤沢庫之助、中村勇太郎の三名である。またしても呉清源は残れない。呉は一勝三敗である。四月、三名による挑戦者決定では、岩本二勝、藤沢庫之助一勝一敗、中村勇太郎二敗であった。

岩本は明治三十五年、島根県美濃郡高津村で生まれ、三歳で韓国の釜山に移り住んだ。十歳から父に囲碁を習い、十一歳の時に釜山に立ち寄った高部道平に認められ、方円社の広瀬平次郎六段に入門した。広瀬は後に方円社の代表となるが、病を得て、ほどなく棋界を去る。岩本も昭和元年に六段を得るや棋界を引退し、ブラジルに渡るのである。

まった知らせが着いたのは、七月の早い時期ではないかと思われる。岩本は七月十二日、記録係を務めることになる三輪芳郎五段と東京駅で待ち合わせ、午後三時半の列車で名古屋に向かった。夜に入ると雨が本降りとなり、名古屋近くで空襲警報が発令され、二人は三時間ほど退避した。空が明るくなると、列車の窓から、一宮の市街が見渡された。岩本は、廃墟となった街を見ながら、対局場に向かうことが何とも不思議に思われた。本因坊戦を絶えさせないという瀬越の気迫に押され西に来たものの、まさに戦場に向かう気持ちになった。

岩本は自身の日記に、「大阪、神戸、明石、姫路、岡山などすっかり焼土となっていた」と記している。広島に着いたのが翌七月十三日の午後十時過ぎであった。警戒警報のため真つ暗な道を進み、宿に着いたのは午後十一時頃であった。岩本は十五日には郷里の島根の江崎に帰って、十七日に五日市に戻ってきた。その間、橋本は六月に二度ばかり瀬越宅を訪れているが、岩本は不在で、二十日になって岩本と合流し、対局日は七月二十四、二十五、二十六日に広島市で打つことになった。

日本棋院広島支部長の藤井順一の協力によって、藤井の会社の別邸を対局の場所として借りられることになった。別邸は、中島地区と呼ばれる三角洲である。北に相生橋、東に元安川、西に本川に挟まれ、東西の二橋を結ぶ通

りである中島本通に藤井の会社は面している。原爆を落とした「エノラ・ゲイ号」は投下目標を相生橋に合わせている。相生橋は、広島市の中央を流れる大田川が分枝する地点に架けられた丁字型の特徴が上空から判別できるために選ばれた。まさにその場所で本因坊戦の第一局が行われたのである。

対局前日、三輪は、青い顔をして地方総監の要請を瀬越に報告した。

「対局は中止されたいとのことです」

「……」

瀬越は三輪の顔を不思議な動物でもあるように見詰めた。「それはできない……いまさら中止などできる訳はないだろう」瀬越が怒鳴った。

青木重臣中国地方総監から呼び出された三輪は、嚴重に中止を申し渡された。青木は、不快な顔を示したという。

「広島は安全ではない。危険な場所である。監督する立場の人間として対局を黙認することはできない。中止せよ。中止できないならば、対局が行われる前に警察に電話し、職権で中止させる」

明日は対局である。どうすべきか。青木総監は間違いなく強制的に中止させるであろう。そうなれば、二人の集中力を妨げ、対局全体に影響がでることは明らかである。

瀬越はまず、好意で場所を提供し、七番勝負の全局分の

いは小さく可憐であった。三輪は碁盤を丁寧に拭き、二日目までの碁石を並べた。第三期本因坊戦第二局が、吉見園（現広島市佐伯区吉見園）の中国石炭社員寮で行われていた。四、五日と晴れて、二日目最後の六日は朝から気温が上昇していた。三輪は背を伸ばして、師匠である立会人瀬越八段に確認を申し出た。瀬越憲作は立ち上がって碁盤の前に進み出た。瀬越の頭にはすでに手順が刷り込まれている。八分方寄せに入っており、もう半日もすれば済むだろうと、盤上を眺めた。

午前八時、対局部屋に岩本薫七段（四十三歳）、本因坊橋本宇太郎（三十八歳）が入って盤上の石を確認した。瀬越が頷くと、三輪は時計を動かした。瀬越は羽織袴を着ているが、時局柄、対局者も記録係もカーキ色の国民服である。観戦者として瀬越の弟、中国海運の社員一人が隣の部屋で控えている。局面は第一〇六手目であった。注目は橋本が岩本の連勝を止めるかにある。東側の窓には日よけカーテンをかけ、南の庭に面する緑側には障子がはめ込まれていた。

先番黒の岩本が打つと、橋本は腕組をして目をつぶった。静かな時を刻み始めたと思うと、突然東の窓にピカリと光線が走り、部屋が真っ白となった。ゴォーという地響きのような音が次第に近づいて、三輪だけがわずかに顔を上げた。家屋全体が軋むと同時に猛烈な風が部屋の

食料まで整えた藤井に相談すべきだと思った。しかし、藤井もその家族も使用人も、この対局のために準備に奔走したことを思うと言い出せない。むしろ、中止命令は自分自身が胸に収め、罪は瀬越が負えばよいと思った。同時に安全な場所に対局をする責任は立会人が負うもので、空襲で負傷する危険性もある。瀬越は大きな口を閉じたまま沈黙した。三輪もまた黙った。三輪には長い時間にも、短いと思うような時が流れ、

「三輪君、総監に電話をすれば君は棋界から去らねばならない」

あっ！ と三輪は叫んだ。瀬越の長い顔が憤怒で赤くなっている。それは、戦争にたいして怒っている顔に三輪は思えた。

第一局は、挑戦者岩本七段の五目勝ちとなった。対局は青木が出張のため事なきを得たが、青木は市内対局を中止させ、代わりに、中国石炭の津脇勘市社長に依頼して、同社の寮を代替の対局場に提案した。広島市から十キロ離れた五日市吉見園であった。

昭和二十年八月六日、その日は雲ひとつない青い空であった。昼過ぎには暑くなるだろうと記録係の三輪芳郎五段は思いながら、黄色い花に目をとめた。南の庭の隅に乏しい配給の足しにわずかばかりの菜園があり、広島市中島町の藤井の別邸庭にも同じ花が見えたが、キュウリの黄色

中を通り過ぎ、部屋は一瞬にして白い煙に覆われた。三輪が、ぼんやりとした中で気づくと、岩本は盤上にうつ伏せになっていた。瀬越は畳の上に座り込んだままで、橋本は、なんと庭の上に立っていた。窓ガラスが粉々に壊れ、碁石も、机も襖も吹っ飛んでいた。瀬越が座ったままだったのは、腰が抜けていたからであった。この爆風は、広島に原爆が落とされたため、五日市は広島から十キロの位置にあった。

瀬越は室内を清掃させた。彼らはこの爆風が広島に落ちた原爆とも知らず、午前十時半ごろから開始し、本因坊橋本の白番五目勝ちとなった。時刻は午後四時であった。

「広島町のようですね」

三輪が東の方を不安の目で眺めながらいった。火はさらに大きくなっていった。

「先生、ご自宅が心配です。戻りませんか」

師匠である瀬越に三輪は促すように身体を近づけていった。

「そうか……」

瀬越は言ったなり、あらぬ声であった。盤に近づき、なんと屈んで検討を始めた。

「二〇〇手目に戻して下さい」

瀬越の言葉で岩本の手から検討にはいり、

「岩本さん、この手は活かしたのですか」

瀬越はたずねた。

「そのつもりですが」

岩本は自信なさそうに応えた。

「本因坊は、どう見ました」

瀬越はほとんどは橋本に聞く。

「はあ、死に石とみえました」

橋本は断言するようにいった。

「そこですよ、この手は実に味わいのある手です。これを黒と打てば白は活き、白がここに打てば白は死に石になる」

「気づきませんでした」

岩本は感じ入ったように碁盤を凝視した。

岩本と橋本は何度となく石を試したが、死活が判然としない展開になった。三輪は、三人が碁を検討し合うのを唾然としてみていた。広島町の町が焼けているのに、瀬越らは全く眼中にないようである。家族の安否が気にならないのだろうか。棋士という職業の凄まじさに畏怖さえ覚えた。対局が始まれば、没我の境地に入り、俗界とは全く離れた魂の戦いが始まる。その真剣な迫力は部屋の空気さえ支配し、余人を近づけない。棋士は、あらゆる手を読み、攻め守るのだが、勝負はまだまだ続くのである。瀬越の手は忙しく盤上に動き、碁石が取られては、置かれた。

五日市吉見園での対局が終わると、瀬越は自宅に戻った。

岩本は、川岸から中島を呆然と眺めた。すべてが炭になっっている。裸の身体に皮膚が垂れた人々が幽鬼のようにさまざまに散らばっている。衣服が燃えたのか全身が焦げたままの群れがいる。川には膨れた黒い塊が幾重も流れて水面を覆っていた。まぎれもなく人の遺体である。岩本は中島を眺めながら、藤井一家の歓待した顔が浮かんでくる。酒好きの岩本に着飾った若い女性が酌してくれた。聞いてみると藤井のハワイの友人の娘で花嫁修行にきているのだという。

「何と贅沢な酒だろう」

と岩本の酒が進んだ。娘は岡本静恵といい、美しいばかりか賢い女性であった。ハワイの歴史を話してくれたのだ。今日の前に見ているものは何だろう……。これは幻なのか……。それとも自分もあの世やらに逝って、あの世に棲んでいるのか。あの世がこの世なのか、この世があの世なのか。対局の後に散策した桜並木、藤井邸の裏手にある慈仙寺境内や高千穂映画館、対岸にそびえる雄大な産業奨励館（現・原爆ドーム）が脳裏に浮かんでいる。青い木々も消えている。中島地区に暮らす四千四百人は忽然と消えたということなのか……。

青木総監から五日市の変更を言い渡されて、誰が藤井に伝える役目にするかもめたが、岩本が負わされた。

「なぜ自分のですか」

と瀬越を責めると、自分も宇太郎も関西人だから情がか

広島市は昨晚中燃えている。翌日、橋本、岩本が瀬越宅に駆けつけると、瀬越の甥栄三が死んだと聞かされた。さらに中学生の四男憲治も広島市内で勤労働員中に火傷を負い危篤だという。

「すまないが、藤井さんの消息を聞いてくれないだろうか」

二人は瀬越の申し出を承諾し、汽車で広島町に入った。広島駅は、待合室が倒壊し、火災により内部が全焼している。続々と負傷者の群れが、駅の北にある東練兵場に向かつて歩いている。

「これが、広島か」

宇太郎は絶句した。ほんの数日前に目にした街は消えているのである。

「ともかく、藤井さんの家がどうなのか見ましょう」

岩本が促して、先に進むと、むっとする臭いが鼻をついた。道々には真つ黒に焼け焦げた人が折り重なるように死んでいた。二人が対局した中島地区は、爆心地に近く、爆心地五百メートル圏内は閃光と衝撃波が同時に襲い、建築物の大半が破壊され、木造建築物は一瞬にして全壊した。爆心地から二キロメートル圏内の木造建築物はことごとく倒壊し、建物の下敷きになった者は、熱線によりおこった火災で命を奪われた。摂氏六千度の熱線が爆心地表面を襲ったのである。街が蒸発しているのは明らかであった。

「何もかも消えている」

らむが、君は島根だし関わりが薄い。それに早口であるからといわれた。岩本は、確かに、早口で用件のみいつて引き揚げたのだ。あれほど酒も肴も用意した藤井一家に謝りたいと悔やんでも悔やみきれない。藤井は突然の変更希望に、

「けしからんことです。対局に官権が口を出すとは。なんとしても続けましょう。わたしが責任をもって阻止しますから、安心してお続け下さい」

と言ったのを、岩本が振り切った形になった。岩本らは命を拾い、藤井一家は命をとられた。

藤井の家族の安否は掴めなかった。家がないということ、家族全員が不明ということである。二人は、さらに歩き続け、町に設けられた救護所で、藤井親子の死亡を知らされた。二人は八月九日、瀬越宅を訪れ、報告と帰郷の旨を伝えた。

「いつ発たれるのか」

瀬越は尋ねた。橋本は今日といい、岩本は明日と答えた。「それでは、岩本さんにお願ひしたいことがある。指導碁をお願いしたい。お世話になった吉見園の小西、梶谷さんの頼みなので」

岩本は承諾した。別れる段になって、瀬越は天を指して、碁を打つ真似をした。満州、支那、台湾、フィリピン、サ

イパン、沖繩と言って碁を打った。二人は瀬越の指先を見た。「わたしの持ち時間短縮は持論である。本因坊秀哉名人も、鈴木為次郎八段も持ち時間が長いほど良い碁が打てるという方であった。碁は早くてうまく打つのでなければ真の名人とはいえないのではないかと思う。何時間くれないわい、良い碁が打てないというのは、名人の域に達していないわけ、相撲でいえば、昔の常陸山のごとく、相手の声でいつでも立つという襟度がなくては本当ではない。碁はそれほど時間をかけなければ名局は生まれないか、という点に私は絶えず疑問を持っている」

二人は、何のことか分からず、互いの顔を見た。

「盤上の石は、取られないかぎり活きている。黒石に囲まれたなかで、活きている石がある。これに」

瀬越は天空にビシッと打った。

岩本は島根に戻り、橋本は宝塚に帰った。東京の日本棋院関係者は、対局場所が移ったとは知らず、三輪がようやく東京に戻ってから無事を知ったのである。本因坊戦は、無期延期となったが、終戦後の十一月十日から開始、翌年の昭和二十一年に決戦三番勝負を七月、広島蓮教寺の原爆被災者追悼会で二手ずつ打ち、残りを高野山総寺院で行った。コミなし白番の岩本が白番五目勝ち。翌日の第二局も勝利し、岩本は本因坊位を得た。昭和十八年七月から始まった本因坊戦は、およそ三年で終了した。瀬越は昭和二十一

年に初代日本棋院理事長に、岩本は二代目理事長に就任、橋本は関西棋院の独立を果たした。

昭和四十七年に瀬越が自殺したと知って、岩本が西荻窪に弔問すると、

「碁が打てなくなったから」というものであった。岩本にはなんとなく頷ける思いであった。

「持ち時間が長いほど良い碁が打てるものではない」という瀬越は、自らの人生にも厳しく律していたように思える。

呉清源は、戦後すぐ瀬越に勧められ、中華民国籍を取得し、昭和四十年まで読売新聞専属棋士として戦い、昭和二十一年八月から始まった「打ち込み十番碁」では本因坊橋本、岩本を負かし、藤沢朋斎（庫之輔）九段、坂田栄男九段、本因坊高川秀格を退けるのである。その強さは中国・台湾に知られた。同時に、十四歳で日本に來た呉清源自らが、日本人は区別なく自分に接し、その天分を愛してくれたと語ったことで、中国人の日本人への憎しみをどれほど和らげたことだろう。呉が、中国籍に戻ったことで、呉の棋界征服は実現したといえるかもしれない。書いてもいない辞表により、日本棋院から除籍になったことを呉は知らなかったといっているから、瀬越の独断であったのだろう。不思議なのは除籍となった呉は対局に差し障りもなかった

といい、日本の棋士からも異議が出ていない。

それにしても、瀬越の描いた戦後の棋界の道筋はなんとも見事なものであったか。あとき、色のない灰色がどこまでも続く広島街を岩本は思い出す。橋本も瀬越もそして自分も原爆で死んでいたのだ。原爆で命を失った人々と、まだ生のある人々が広島街に、いや全国に同じ運命の人がいたのだ。

岩本は坂道を降りながらふっと空を見上げた。十九路盤の真ん中の星は天元である。呉少年が本因坊秀哉名人に打った手こそ天元であった。本因坊家が存在していた頃は、封建色が残り、打ってはならない手、「坊門の禁手」があったが、それを呉清源は、「定石は固定したものではなく、白黒の石が最善に働いている打ち方を定石と名づけているに過ぎない」といったという。自由な発想こそ新しい定石なのだ。呉の棋譜こそ未来への希望である。平和に戻ったら、大空の向こうの中国に呉を返すという誓いを込めて、瀬越は天に向け打った……のだと。

*活き死に

相手に取られない石が活き石。取られる石が死に石。死活は囲碁において重要な概念とされる。

*二先二

下位の者が三局のうち一局を先番、二局を二子番とする

こと。

*年齢表記

満年齢ではなく数えであら

わしている。

参考文献

「昭和囲碁風雲録」 上下

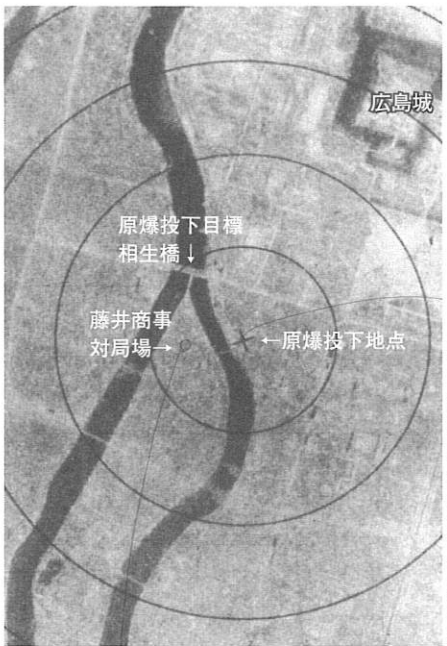
中山典之・岩波書店

「呉清源」

江崎誠致・新潮社



藤井商事が入居していた住友銀行広島支店一部を残して壊滅した。右後方は原爆ドーム

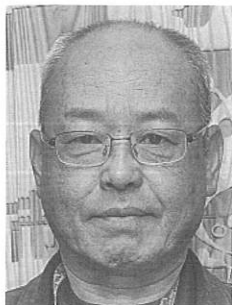
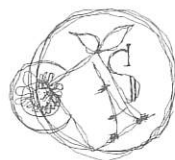


「落日の譜」
 「囲碁ワールド」
 「広島原爆」
 「風と刻」 上中下
 「昭和の碁」
 「呉清源棋話」
 「呉清源とその兄弟」
 「岩本日記」

団鬼六・筑摩書房
 日本棋院
 諏訪澄・原書房
 橋本宇太郎詰碁名作選・松籟社
 江崎誠致・立風書房
 呉清源・三一書
 桐山桂一・岩波書店

告知

文芸思潮は今年度より年四回の発行とさせていただきます。今年に移行の関係から1月、6月、9月、12月それぞれ月二五日に発売です。よろしく御了承のほどお願い申し上げます。



工藤辰吾

(吉田光春改め) くどう しんご

1952 北海道室蘭市生まれ
 明治学院大卒・シドニーに遊学
 会社勤めののち 89年独立して会社経営
 2008年千葉県山武市に移転
 98年「遠い刃」を新風舎より出版
 第8回銀華文学賞歴史小説賞「幻の松尾城」佳作
 第9回銀華文学賞歴史小説賞「榎本武揚と手袋」優秀賞
 特選小説5月号「岬の記憶」
 第10回銀華文学賞歴史小説「鎮遠自沈ならず」特別賞



受賞の言葉

工藤 辰吾

「天空に打つ」は別の作品から生まれたものであった。それは昭和二十九年九月に青函連絡船が沈没した「洞爺丸遭難」を題材としたもので、一五五人が亡くなった国鉄最大の事故であった。これに触れると長くなるので省略させてもらうが、要するに、日本製鋼所の労働組合の囲碁名人が、北海道に遊説に来ていた社会党代議士と青森に着くまで、碁を打つ約束のもとで、洞爺丸に乗り合わせることにした小説であった。

碁を調べているうちに、原爆下の囲碁対決というものが目止まり、これを題材にすべきだと思った。たまたま平成七年の中国映画「呉清源極みの棋譜」というものがあり、原爆が投下された場面がないかと見てみると、わずかに七十秒ほど再現されていて、瀬越憲作が柄本明、橋本宇太郎が大森南朋で、岩本薫は登場していない。立会人瀬越は国民服で、私の作品では紋付袴である。記録係の三輪芳郎も隅に映っている。原爆が落ちて碁盤にうつ伏せになっているのは岩本先生と思われる。Uチューブで見られるので、この場面を是非ご覧になって下さい。

今回の受賞作「天空に打つ」は、戦時下における第三期本因坊戦を三年に渡って決着させた物語である。何故、彼らには本因坊戦を継続したのか。総てが統制されていた戦時下であっても、軍部も口が出せない「聖域」であったのだ。

この「聖域」こそ自由な領域であった。広島平和公園には、対戦場所を貸してくれた藤井一家の住まいが「原爆下の本因坊戦」として残されている。

ところでわたしは囲碁も将棋もできない。囲碁を書いているのではなく、本因坊戦を書いているところ承知願いたい。選考会直後、五十嵐編集長から受賞の連絡電話を頂戴したが、「何の賞ですか」と尋ねていた。時代小説としての賞は都合三回載っている。今回の作品も時代ものの範疇に入るであろうから、「歴史小説」の冠が付くと思ったのであった。「当選ですよ。みんなの拍手が聞こえるでしょう?」との声であった。エンターテインメント作品には「当選」は得られないだろうと考えていたから、実に感謝である。近くの評論家より遠くの「文芸思潮」だとシミジミ思った。次は長編に挑戦したい。

付記 作品に出てくる橋本宇太郎九段が偶然にも、昨年第十一回囲碁殿堂入りとなりました。囲碁の関係者、ファンには本因坊戦の戦前の歴史を知り得る作品だと思えます。囲碁ファンには必須のアイテムになるはずで、せめて二十万人が買い求めているだければ泉下に眠る瀬越先生ほか、まだ存命である呉清源先生も喜んでくれることは間違いない……と信じています。この作品を掲載した「文芸思潮」の購入を囲碁好きの人に広くお勧め下さたくお願い申し上げます。

アクリル板

原 浩一郎

希望で遺品を送付したと簡潔に記されている。

執行されたのだ。

ノートを一冊取り出す。表紙には表題と書き出し書き終わりの日付らしい二つの年月日が記されている。中をめくった。角ばった癖のある文字がいつばいに並んでいる。あれから、もう七年になるのか。

*

「先生、ご無沙汰しています」

アクリル板の向こうに現われた男性は、腰を下ろしながら勢い込むように口を開いた。

段ボール箱が届いた。

「重いですよ」

配達員の言うとおりに、受け取るとずしりとした重みに思わず腰をかがめた。

ゆつくりと荷物を床に下ろし、伝票を受け取る。そこに印刷された送り主の名に、一瞬はっとして手を止めたが、すぐ気を取りなおし受け取りのサインをした。

「ご苦勞様。配達夫を送りだすと、もう一度伝票の送り主を確かめる。」

京都拘置所。

すぐに、察した。

テープをはがし、箱を開く。ノートだ。何十冊もの。添えられている一枚の事務書類と茶封筒。書類には、本人の

「ああ、もう二十年になるかな。連絡が来て、びっくりしたよ」

意識して少しゆつくりと答えた。

「僕のこと覚えてはりましたか？ 先生も肥えはったですね」

情念のこもった彼の眼だ。確保^{まもら}の眼だ。変わらない。

「榊君もおじさんになってる」

拘置所では収容者も私服だ。彼のポロシャツは色落ちして襟のあたりははつきりと変色している。

「先生、僕の事件のことは知ってはいりますか？」

椅子から腰を浮かせ前かがみになって、低くくもった声を張る。

私はうなずいた。

「どうせ、死刑になるんですけど、なんとかしたいんです」

私は用意していた言葉を告げた。

「榊君、僕はもうずっと前に裁判所をやめてるんだ。今は全然違う仕事をしている。申し訳ないんだけど、力にはなれないと思う」

彼は私の言葉にうんうんとうなずきながら、椅子から腰を浮かせ、アクリル板に手をかける。記録をとる係官から注意されると、はい、と腰を下ろし背筋を伸ばし、両の手をももの上に置いた。

「ちがうんです。先生。そうだろうと思っていました。迷

惑でしようけれど、話がしたくて」

痛みに耐えながら作り笑いするような、奇妙な表情だった。私の胸に重苦しい痛みが伝わった。

やにわにその眼に怒りの色が宿った。

「先生にも責任があるでしょう」

どすのきいた声だった。すぐに表情を変えると、彼は饒舌に語り始めた。

「どのくらい来れますか？ 上告で負けると死刑が確定して、もう誰にも会えなくなるんです。あとは死ぬだけです。でも、本当にありがとうございます。来てくれて、感謝しています。」

クソ弁護士は一度も面会に来ないんですよ。あの国選のクソ。あいつのせいだ。どれだけ恨んでも恨み足りない。

先生、最高からの通知が早けりや来月にも来るんです。先生、毎週でも来てくれませんか？

重苦しく気の進まない面会だったのだが、彼と会って私は覚悟を決めた。私は彼と会わねばならない。

「うん。仕事があるから毎週は多分無理だけれど、できるだけ来るようにするよ」

彼の顔がぱっと明るくなると、そのまま眼を閉じ口をへんの字に結ぶとうなだれた。歯を食いしばり、涙をこらえているように見えた。

それから差し入れの希望を細かく尋ねる間に、面会時間は終了となった。

エレベーターで一階に下りると、雨の音がする。玄関ドアをくぐると、細い雨脚が駐車場の地面を叩いていた。見上げると、薄いグレーの雲が覆い包むように垂れ込めていた。

まもなく夏だった。汗ばむ京都の蒸暑さが惱ましい。私は毎週、彼の話を聞いた。

十六年前、彼の起こした二件の殺人未遂事件に対する無期懲役判決が、そもそも不当なものだったと彼は興奮して訴える。

それは彼の猜疑心と暴力から逃れるため身を隠していた妻を、その相談相手であった勤務先の店長ともども用意した包丁で刺した事件である。生命は取り留めたものの、深刻な後遺症を残す重症を負わせた。さらに、その足で妻の実家へ乗り込み、義父にも瀕死の重傷を負わせた。

彼によると妻と店長は以前から不倫関係にあり、実家くるみでかばいだてて彼を遠ざけたのは、彼に身寄りがなく孤独であることにつけ込んだ嫌がらせであり、むしろ彼こそが被害者だと訴える。もちろん傷つけたのは悪いことだ、わかっている。しかし、身体を傷つけられる以上に人生を、心をずたずたに傷つけられ続けた彼の、やむにやま

れぬ自衛的行動だったというのである。

その事件は当時新聞にも大きく報じられ、そうした彼の言い分も、反省のない被告の身勝手な主張として報道されていた。

二人に不倫関係はなかったとされていたし、義父は田舎の大人しい農夫にすぎず、娘の夫婦問題についてはもとより知るころではなかった。妄想に駆られ被害感を昂じさせやすく、切れると自己制御の効かない彼の危険な性状を浮かび上がらせる事件と受け止められていた。

私は報道に大きな衝撃を受けた。退職後も守秘義務があるため誰にも語ることはなかったが、家庭裁判所の事件担当者として約半年濃密な交流を持った少年が重大事犯でテレビや新聞に大きく取り上げられることに、激しく心動かされた。彼を担当したことは、私にとって家庭裁判所を退職する遠因となった胸苦しい体験であったからだ。

「先生」

私はもう彼の担当でもなければ、裁判所の人間ですらない。その呼び方はやめてほしいと制したが、彼は頑として聞き入れなかった。そもそも少年のときですら、彼は私を佐々木さんと呼び先生とは口にしなかったはずだ。先生という呼称に違和感、抵抗感は消えなかったが、私はあきらめた。

翌週は無駄足となった。彼が規則違反を犯し、懲罰を受けていたため、面会はできなかった。

拘留所の門を出ると、しばらく民家の間を抜ける。大きな通りにはたくさんの人が忙しげに行き交い、すれ違う。ひとり空気の止まった狭い保護房の中央に座り、わずかでも身体を動かすことを禁じられ、ただじっと見るともなく壁を眺めている彼を思い浮かべる。行き交う誰一人、そうした彼のことを思う人はいない。共に生きながら、別世界を生きる。知らぬ者同士として。一人であること。生まれてよりそのことから逃れようと懸命だったはずなのに、そうして人生の終わりをたった一人で最終宣告されようとしている。私は地下鉄の吊革を握り、彼が生きた断片に思いをめぐらせた。

懲罰は二十日を超えた。

「ひと月ぶりだ」

私の言葉に、彼は顔を上げた。そして、くちびるを柔らかくむすんだまま、私を見つめた。私も視線で応えた。そうして、彼はまた視線を落とした。

沈黙が流れた。

私は、祇園囃子の鉦かねの音がもう聞こえることなど話した。彼は一言も発しなかった。

翌週も。また、その翌週も。

「先生、里香とは本当に愛し合っていました。今でも心から愛しています。なんとしても直接会って詫言いたい。そうすれば、もう一度必ず二人でやり直せる。それだけ考えて懲役に服したんです」

彼は変わっていない、と私は思った。十八歳のときも、一人の少女のことをそう語っていた。

「先生は俺が昔と何も変わってへん、と思っってはるでしよう」

内心どきりとした。しかし、表情には出していないはずだ。「俺だって馬鹿じゃない。一人芝居だと分かっている。昔とは違う。しかし先生、あんな親のところに生まれなければ、こんな俺にはならなかった。普通の親だったら」

彼は口をつぐんだ。しんとした静寂が部屋に満ちる。「俺もう死ぬんですよ。どうすればいいんですか」

はじめから分かっていたことだが、私には何も語るべき言葉がない。

「先生は知ってるでしょう。俺には家族もない。あてにならぬ連れもない。だから誰一人面会に来ない」

アクリル板に小さな虫がとまっている。動かない。ただの汚れだろうか。彼はうなだれたまじじつとしている。そのままその日は何も話そうとはせず、面会時間を終えた。

そして、面会を断られた。

独居房に収容され工場作業もない彼には、言葉を交わす相手がない。それが何年も続くと、実際に話そうとするにも困難を来たしはじめると聞く。その気がかりもあって、誰もいないなら私がせめて話し相手になろうという思いであつた。しかし彼は、自分から孤独を選んだ。

蟬の声が響き、うだるような熱気の向こう、青空に白くせり上がる積乱雲。

自宅の事務所でパソコンに向かい、ブロックパズルのようにプログラム言語を打ち込みながらも、心のどこかで彼のことを気にしていた。

今の彼の選択を見守ることも、私の見届け人としてのなら変わらない役目に思えた。

彼から、再び面会を求める短い葉書が届いたのはもう夏が終わる頃だった。

わずかの間に、老け込んだように見えた。

ずいぶん久しぶりのように感じる。

「元気でしたか」

「ああ。君の方は大丈夫だったかい」

少し時間を置いて「絶好調すよ」と少し笑った。が、す

「わかった」

私はうなずいた。そして言葉を続けた。

「僕からもお願いがある。先生でなくて、佐々木さんと呼んでくれるか」

「そのつもりでした」

無性に胸が息詰まり、こみ上げるのを耐える。

「そんなに祇園祭が好きかい」

アクリル板をはさむ二人の間の空気を払うように、身体を揺すりながら声を張って尋ねた。

「外に出ている証明やさかい」

理解した。必ず出かけたと言つても、数回のことだ。

「最近ちよつとしんどいです。ずっと横になってたいくらいです」

彼はそう言つて視線を落とす

「体調悪いのかい」

「何もやる気しないです。いろんなこと考えてしもうて」

両手の指をいじりながら、語る。

「頭がおかしくなったのと違うか、と思うくらい、いろいろ考えてまうんです。ずっと」

「たとえば？」

「昔のこととか。考えたかてしようないのに」

過ぎたことをそういう風に思い出すということをしたことがなかったのだ。

ぐに何か茫洋とした表情に戻る。ひどく疲れて見える。目の色すら違ってしまったように見えたのは、白目がかなり濁り、涙目になっているからだ。

「祇園祭、どうでした？」

「え？」

一瞬わからなかった。

「ああ、祇園祭。いや、行っていない」

「そうですか。コンチキチンのこと言うてはったから」

「うん、そうだったね。実は僕は祇園祭、ほとんど行ったことがないんだ」

「まじすか。俺は必ず宵山か宵々山行ってましたよ」

「すごい人だろ。ああいうの苦手なんだ」

また少し彼は笑みを浮かべ、また静寂が流れた。

「もう、俺のことで無理せんといってください」

いきなり彼が言った。

「無理して面会に来なくてええです」

私は言葉に詰まった。そしてなぜか恥ずかしさと苦々しい後悔が襲ってきた。

「来たいときだけ、来てくれたらええです。来てくれ頼んだの自分ですけど」

私は奥歯を噛み、胸ふさぐ思いに耐えた。彼は深い溜息をごまかすように息を吐くと、力を抜いた顔で少し目を閉じた。

「もうぐったりしますわ。佐々木さんもそういうことありますか」

「ああ、しょっちゅうあるよ。思い出して落ち込む」

「そうですか」

彼は苦しい表情をした。

足取りは重かった。それは悔いのせいだ。しかし一方で、肩の荷を降ろし身軽になったような解放感がある。うまく言えないが、彼に嘘をつきたくはなかったのだ。もう嘘をつかずに、正直に彼と自由に会うことができる。そう思えた。彼のおかげだ。私は心で彼に感謝した。

地下鉄に乗り込むと、同じ緑色の体育帽をかぶった小学生たちでいっぱいだった。まるで箱の中の子犬たちのように、じゃれあい、動き回り、顔寄せ合っている。引率の若い女性教員の周りにも、まとわり着くように小学生になり立ての子供らが群がっている。車両がブレーキをかけるごとに、大げさに身体を傾け声を上げはしゃぐ。弾けるように発散しているのは、未知への可能性だ。その先の物語はそれぞれ誰もわからない。その邪気ないはじまりの気配はまばゆかった。

この年、残暑を吹き払うように台風が続げまに来た。アクリル板越しに彼と交わす会話は、もう私の日常の一

部となっていた。夜半から暴風になると予報は告げていたが、私は代理店との打ち合わせを終えると雨の拘置所に駆けつけた。

ぬれた手の雨をぬぐい、面会申込書に事項を記入する。もう勝手に手が記入するほど、書きなれていく。面会室への順路も、すでに身体に刻まれている。記録係の刑務官はそのたびごとに替わるのだが、表情には出さずに私に目で語りかける者もあった。中でも、或る大柄な刑務官は彼を入室させると、決まって私と目を合わせた。直接言葉を交わすことはないが、私はその目にねぎらいのようなものを感じていた。その係官は私たちの会話の様子によって十分を超えて時間を許すこともあったのだ。

「今日はすごい雨だよ」
「そうすか、台風来ていますね」
「今夜近畿を通過するかもしれないよ」
このところ彼の顔色もよい。目はぎよろりとして眼光も鋭いが、髪を短く刈り上げたこともあり、精悍な風が出てきて、全体健康そうな印象を与える。

「佐々木さん、九州だから台風は慣れてるでしょう」
「うん。僕ら小さい頃は台風が楽しみでね」
最近私が語り、彼が聞き役になることもたびたびだった。台風が近づくとう学校は休みとなり、家族総出で雨戸を釘で打ちつけ、停電に備えろうそくなど用意して夜を待つ

が、それでも長期刑ゆえに六十万以上を手に出所していた。四箇月の間にそのほとんどを使い果たしたのだが、毎日仕事をせず何をしていたのか。自分が殺害をはかった別れた妻の行方を捜していたのだ。彼はただどうしても直接謝りたかっただけだとは言いが、幸いにも見つけ出すことはできなかった。

持ち金が底をつきはじめ、彼は手っ取り早く働くことができる石成にやってきた。石成であれば、素性経歴を問われることなく、仕事にありつくことができる、よく知っていた。しばらく働いてまとまった金ができれば、また女を捜すつもりだった。

やってきたその日のうちに職安センターの前にとまったバンに乗り込み、安木組の飯場に着いた。現場は和歌山の郵便局の解体だった。それからいくつかの現場を渡り歩き、安木組で半年働く。そうして再び石成に帰ってきた。蓄えができたからだ。

「天王寺に着いたのは夕方、駅を出るとちようど通天閣が見えました。無性に安心したのを覚えてます」

その光景をありありと思い出すように、彼はそう言った。「公園を通り抜けようと思ったんです」

その公園は動物園や美術館をその敷地内に擁する広大な市営遊園であり、多数の無宿者が生活していることで知られていた。

当時の様子を語る。電線をひゅうひゅうと笛のように鳴らし、殴りつけるような風の塊が家を叩く。迫る危機の中で、不思議な高揚感に興奮していた当時の心情をなぞり、私は語っていた。

「あの日もすごい雨降りでした」
彼が口をはさんだ。

え？ という私にかまわずに、彼はうつむいたまま言葉を継いだ。
「あいつが、どうせならあんたの手で死にたいって言ったんだ。」

あのときはなんて薄気味悪いこと言いやがるんだとぞっとしたけど、今なら、あ、そうか、と多分納得すると思う」
なんのことも、わからない。

「一人で死ぬくらいなら、なんぼかました」
そう独り言のようにつぶやいてから、目を上げて私を見た。

「俺、殺してないんです。いや、殺したんだけど、手伝っただけです」

十六年に渡る服役の後、榎保は仮出獄したものの就職もせず、四箇月後に保護会を無断で退去した。そうしてたどり着いたのが、大阪の石成だ。

懲役の作業で得られる報酬は月に八千円程度に過ぎない

「通り抜けるつもりが、どこで道を間違ったのか茶臼山に出てもうた。知ってますか。大きい堀に囲まれたちんまりとした森ですわ。懐かしくてねえ。橋の欄干から堀を見下ろしていると、たくさん亀が寄ってきよった。どんどん寄ってくるんですわ。何か食べ物もらえんと思つて」

ふと、時間が気になり、「それで？」と促した。

「そうしたら、知らない親父がやってきて、俺に話しかけてきた。知らんおっさんです。えらい親しげで、亀のことやらすつぽんのことやら、聞いてもないのにべらべら話すんですわ。それで、ジュースおごつたるって、茶臼山の広場の自販機のとこ行つたんですわ。でも見るからに金ない汚いおっさんやさかい、俺の方がおごつたつたんです」
彼の表情がとても優しくなっていた。

「ええおっさんでしたわ。俺の年とか生まれとか聞いて、息子と似てるのか言うて、ほしたら急に泣きよるんですよ。びっくりして、おっさんどないしたんやと言ったら、息子に悪いことした、言うて女みたいにめそめそ泣きよるんですわ。ほいで、生きていてもなんの役にもたたん、六十年以上人に迷惑かけるだけやった、なんもええことなかった、死にたい、言うんですわ。そこからがおかしいんですわ」

記録係の係官も下を向いたまま、じっと聞き耳を立てているのがわかった。

「そんなうっとおしい話聞いて胸糞悪くなるのが普通なの

に、そんなとき、俺まで泣いてしもたんです。おっさん、たいへんやっとなあ、言うて。もう、暗くなってました。おまけに雨まで降り出したんです。泣きながら、雨でびしょりですわ。それでおっさんが言うたんですわ。あんたの手で死にたい、て」

「息子に悪いことした。もう詫びようがない、やから、あんたの手で死にたい、言うて、ビニール袋からひも取り出して、これでやってくれ、て自分から首に巻きつけたんですわ。俺ももう涙が止まらんようになって、ひも思い切り引っ張って、おっさんは眼向いて、それでも、おおきに言うみたいいうんうんてうなずきよったんですわ」

それが、彼の殺人事件の真相だった。拘置所の外は大変な土砂降り、台風の強い風が吹いている。私は友人の弁護士にすぐ電話をかけた。上告趣意書はもう三ヶ月前に送達されている。おそらく上告に相当な理由はないとやがて棄却されるだろう。そもそも、一度も面会にも訪れず、彼と話もしていない弁護士だ。国選でどの弁護士にあたるかで運命は変わる。嘱託殺人であるとの主張があつたにせよ、結論は変わらないのかもしれない。いずれにしても、私の手に余る。私は詳細を伝え、法的対処は信頼する弁護士に委ねた。

物心ついた頃にはもう彼に家はなかった。彼と父は石成の路上で暮らしていた。それは暮らしとは言えない。父から金を貰ったら店でパンを買う。金がなければ、払わずに掴んで走り出す。父と二人社会の片隅を生きてきたなどという美しい話ではない。父は弱い人であつた。酒に溺れ自暴自棄であつた父は彼のことにかまってはおられなかった。愛情がないわけではないが、父自身が自分の人生を捨てていたので。児童相談所の手にかかるまで、彼は小学校にも通わず路上生活をしてきた。その舞台は石成である。石成は彼の故郷だ。

そして茶臼山についても記述があつた。子供を連れ無宿者があるとの情報は以前からあり、兇相のケースワーカーがたびたび石成を訪れたが彼を見つけないことはなかった。ワーカーが噂の浮浪児を見つけたのが、茶臼山であつた。異臭を放ち、見るからに栄養状態の悪い瘦せぎすで、服は汚れ切っていた。ワーカーが声をかけると、父親を待っているのだと答えた。いつから待っているのか尋ねると、こともなげに十日くらいと返事をしたと記されてあつた。

そこから彼の施設人生が始まる。彼は当時のことを覚えているのか。いや、忘れたはずはあるまいと思うが、嫌な記憶は封じられる。

彼は誰にも話せていなかった事件の経緯を初めて打ち明けられたことに、満足している様子だった。どうせ死刑になるのだから、と彼はよく口にしたが、その心情については私にははかりようがなかった。

ただ、私は茶臼山での一件を聞きながら、彼の人生の不思議な符合に心打たれていた。

私が彼を担当したとき、彼はすでに長期の少年院収容を二回経ていたし、今は自立支援学校と呼ばれている当時の教護院を出ている。その前は養護施設である。彼は典型的な施設育ちであり、家庭を知らない。

彼はいわゆる「悪」ではない。家族や社会に守られながらも、逸脱し牙を向く者も多いが、多くの人には想像もできないほどに、彼は守られない存在であつた。社会で生きるひとつひとつが、人にはどうとういうことのないただの道であつても、彼には通行を許されない巨大にそそり立つ彼岸な障壁であつたりした。社会で当たり前に備わっていると前提とされているものを彼は持っていなかった。それは彼のせいではなかったが、なぜそれが無いのだとせば彼は責められた。十八歳の彼はその不公平を恨んだ。

児童相談所の記録には幼時の彼の様子が断片的に記されていた。

茶臼山に残した子供を思い、飯場から帰ってきた父のことを思う。いるはずの息子がいないことを、どう思っただろう。彼に殺害された老人と重なる。

私は彼の父に会っている。彼との交渉はずっと以前に絶たれていたが、法的にはやはり親権者である。私は彼をまた拘禁施設に送るにあたり、会わないわけにはいかなかった。

父は末期の病床にあつた。話をするのも辛そう、医師によるともうあとひと月もつかどうか、という病状であつた。

かすれた弱々しい声で、父はしきりに詫び、自虐の言葉ももらした。父親らしいこと、何もしなかった。それはそれとおりで、ただの事実の述懐とすら思えるが、その言葉には自責と悔恨が確かに含まれていた。

私は当時まだ若かつたため気がつかずにいたが、それは末期の後悔、人生の終わり、死を前にした思いであつたのだろうと今は察する。

外は激しい風と雨である。風も雨も感じられない場所に虜となつて、おそらくはもう二度と雨に打たれることも風煽られることもなくなった彼のことを思う。今、何を思っているのだろうか。

取り返しをつかない過ちを重ね、人の人生を奪い去ろうとした報いとして、自らのいのちを奪われようとしている。自分自身のいのちの所以と和解できぬまま。いかなるためのいのちと抱きしめることもないまま。

その孤独な彷徨。深く人を傷つけ壊すことを重ね、まるで誰にも抱擁されず、遺棄されるようにして葬られようとしているその存在、いのち。

なんのために、榊君、生まれてきた。

私はたまらなくなる。もし、ただ蛇蝎のごとく嫌悪され憎まれて、忘れ去られるだけのいのちであったのであれば、なぜ、榊君、生まれてきた。

そして、榊君の後ろに累々たるしかばねの山を見る。無念のまま、まだ孤独の咆哮を唸る魂たちの群れ。

ならば私はどうなのか。甲斐あるいのちを送っているのか。

風雨の響きを聞く。

少しずつ秋の気配が忍び寄ってくる。拘置所に向かう通りの街路樹もずいぶんと葉の色を変えてきた。

アクリル板は、私と彼を仕切り隔てる障害ではなく、むしろ私と彼を結ぶものではないか。それほどに愛しさのようなものを感じる。私たち皆を隔てている見えない不理解の仕切りに比べれば、アクリル板はなんと直接に私た

ああ、本当になせ生まれてきたのだろう。彼の問いを私は心で抱きしめる。

「隣相園の先生で桐山って女の先生いたんです。好きだったな。可愛がられるとあとで上級生に締められるから、誰も見ていないところで先生に触ってドキドキしてました。柔らかくていい匂いがして、優しくかった。一度だけ、抱いてもらった。俺そのときしがみついて、泣いてしもうて、保君どうしたん、て。うれしいのになんで涙が出るんや思いました。俺が四年のときで、もう五年になったらいなくなつて、ものすごく寂しかった。誕生日に内緒でプレゼントくれるて約束したのに、嘘つきよつた。だましょつた。休みにはずつと一人で探して歩いた。よしこ先生どこに行つた、て。大阪の町探し回つた。会いたかつた。どうしていなくなつた、て。あきらめられんかつた。どうしても会いたかつた。会つて、どうして俺を見捨てたて聞きたかつた」

どんなにか会いたかつたか。

「みんなええ人はいなくなる。俺から。俺のまわりからいなくなりよるんですわ。

佐々木さんくらいや、別れてもまた会えてるのは。奇跡ですわ。俺つて感謝せんでしよう。だから嫌われるんですよ。何をしてもらても、もつとしてくれ、やさかい。俺かてそんな奴いたら腹立つわ。何様や。ええ人につけ込んで。優し

ちをつないでいることか。「袋貼りの作業がなくなつて、ただじつと座ってるしかないから、考えごとばかりしてます」

彼は言う。

「考えるのはやつぱり死ぬことです。死ぬなんて思いもしないでしょう。俺も死刑判決受けたつて、死ぬこと考えられなかつたですよ、ずっと。でも、茶臼山のことやつと話せて、俺が手伝つて殺したつた親父のことを話してから、これで俺もあとは死刑で死ぬんだと、ずーつとそのことだけ、考えてますよ」

私は黙っている。

「俺の人生のこと考えますよ。終わるんだ。もうこれで終わりなんだつて」

口をつぐみ、ちよつと下を向いた。

「三人殺しかけて、とうとう一人殺しちまつて、俺立派な人殺しじゃないですか。殺人者。なんでこんなことになつたんかな。死刑当たり前や。俺、殺人鬼や」

口調は静かだ。

「それが俺の人生だつたつてことすよね。俺はそう生きて死刑になるつてことすよね。なんで生まれてきたんかな」

そう言つてもう一度繰り返した。

「なんで生まれてきたんかな」

私はただ聞いている。

い人見つけてはもつと優しくせえつて脅して、そらほんまに嫌な奴や。

よしこ先生も兎相の片山も学校のなんとかつて奴も全部。俺好きになつて最後恨んで、おかど違いや。それが俺の人生や」

私は目を見張つて聞いていた。

「ほんまにええ人たちやつたなあ、て思いよるんです。感謝してますわ。これが感謝か、思いながら。思い出して、ひとつひとつありがとうございます、言うて。妙に落ち着きますわ。とことんやな奴、思つてましたけどね。違いました」

面会が終わる。彼が頭を下げ、そして係官と一緒に、ドアを出て行くのをいつものように見送る。アクリル板越しに。

選任を交替した弁護士によると、被害者の同意囑託があつたという彼の供述で上告審に影響を与える可能性は低く、その真偽を審理する必要を認めるだけの資料を揃えるには、あまりに彼が非協力的なのだという。つまり、彼が「もう、ええですわ」と言っているのだという。そうか、と私は思った。

もう遅すぎるくらいなので、いつ上告棄却の通知があつ

でもおかしくなかった。それは、私と彼との面会の終わりを意味する。

死刑が確定すると、面会は親族に限られる。彼にはない。たとえば私が彼を養子縁組するなどのほかに面会の手段はない。面会だけではない。手紙も弁護士と親族にしか出せない。社会から遮断され、もう彼は見えなくなる。

さらに、死刑がいつ執行されるのか、それは当日までしか分からない。当日である。それも、刑場の部屋に連れて行かれて始めて告げられるのだ。覚悟を定めるところか、とまどう時間すら与えない。だまし討ちのように、一気にやってしまうのだと聞く。

死刑執行を待つだけの何年もの日々をそれから送ることになる。確定後に執行までに五年以上の歳月がかかるのが一般的だという。

彼もそれは十分に分かっている。

街路樹のプラタナスが路上に色を散らすと、風はもうやがて来る冬の気配を伝える。

いつものように外の様子を一言伝えると、彼がこの間に思ったことを語る。それが、このところの流儀だ。

「よう考えたら、佐々木さんも変わってるわ。一円にもならぬのに俺のように付き合いますね」

「ああ、自覚してる」

今度は殺さへん。恨まへん。自信ないけどな」

そう言って、後ろ背にもたれた。

「だから残りは次の予習復習や」

両の手の指を組み、頭の上に高く伸ばし、伸びをする。

「失敗やった。ひどいことしてしもた」

そう言って口を結ぶと私から目をそらし、あたりの壁を眺めるようにしてごまかしている。

目を開き咳払いして、懸命に涙を堪えているのがわかる。

「先生、ありがとうな」

笑いながら、言った。

「僕こそ、ありがとう」

私も笑いながら言った。

弁護士から、上告棄却の通知があったと連絡があった。彼は異議申し立てしないと云っているの、死刑が確定する。

面会の可否はかなり拘置所の裁量なので、しばらくは面会が可能かもしれないとのことだった。

通うのはこれが最後になるのかもしれないと思うが、信じられない。地下鉄の階段を上がると女子大の裏の通りを歩く。民家の間を抜けると、拘置所の塀が見えてくる。回り込むと、門だ。

「一度いっしょに外で遊びたかったすね。蛸薬師にMAS Aっていう馴染みの店があるんですよ。女も若いし、俺が言ったらマスター店閉めて貸切にしてくれるんですよ」

「ああ、呑みたかったね」

「来世の約束や」

「生まれ変わりを信じるかい」

「だって知らん間に生まれたんやから、また知らん間に生まれてくるに決まってるですよ」

約束でっせ、今度会ったら飲みましょ。

忘れたらあかんで」

そう言って、彼は親指を立てたこぶしをアクリル板につけた。私も同じようにこぶしをアクリル板につけた。

「約束や」

もう一度彼は言った。

「今度はどんな人生がいい？」

私は尋ねた。

「一緒や」

意外に思った。

「今回失敗したんやから、も一回同じ目におうて、やり直させなあかんと思うわ。こんだけあかんかったのに、今度は勘弁してくれなんて虫が良すぎるわ」

私も小さく笑った。

「今度も家なし母なしクソ親父や」

面会申込書に記入する。番号札をもらって待つと、これまでと変わらず番号を呼ばれた。良かった。

いつものように先に入室して、彼を待つ。目の前のアクリル板に手を伸ばし、触ってみる。分厚く二重となっている。私と彼をつなぐ、アクリル板だ。私を彼に届け、彼を私に届けてくれた。

彼が入って来た。後ろの大柄な係官と目が合い、私は一礼した。係官も表情を変えないまま黙礼する。

椅子を引き寄せると、彼はゆっくりと腰を下ろし、そして音を立てて椅子ごと前に寄る。いつもの一連の動作だ。

「ずいぶん朝晩は冷えるね。もう紅葉も見頃だから、観光客がぐっと増えてきたよ」

彼は話題に應じずに、何かくしゃくしゃにした用紙を取り出し、私にメモを取るよう言っているから、読み始めた。

「俺の思い出の場所です。近くに行ったら、俺のこと思い出してください」

茶臼山、門倉製麺所、京都駅……」

ずっと読み上げる。

「……京都の少年鑑別所に京都家庭裁判所」

読み上げるのをやめて、顔を上げた。

「俺と佐々木さんの思い出の場所や」

そう言って歯を見せて笑った。

紙に目を落とすと、再び読み上げる。

私にはわからない場所や聞き取れないところもあって、私は半分しか記録できなかった。

「こんだけあったら、忘れへんやろ」

彼は誇らしげな顔をした。

私はメモを見返し、何か言おうと思うのだが、言葉が出ない。

彼から希望を聞き、差し入れを持ってくればよかった、と今さらのように思った。

彼のことを正視できない。

彼が何か言ったが、聞き取れなかった。僕の方がぼうつとしてる。

そして彼が、先生、と私に呼びかけた。

「佐々木さんだろ」と打ち消したが、どうでもいいことを言っていると、自分で思った。

「先生にはいつかきちんと言おうと、ずっと思っていたんですけれど、あのときはすみませんでした」

心が空白になった。

「裏切られた。こんガキはなめくさって、と頭に血が上ってしもうて、ひどいこと言いました。本当に、すみませんでした。あんなに思ってくれたのに、謝らなあかんとずっと思っていました。すみませんでした」

手を机につけて、彼は頭を下げた。

私は突然嗚咽がこみ上げ、うっ、うっ、うっ、と喉が鳴った。

私はまだ、家裁調査官となって三年目の若手だった。少年院収容となるところを、処分を保留し調査官が見守り社会内で更生をはかる、試験観察に付し、私は彼を希望どおり知人宅に返した。

しかし彼にきちんとした見通しはなく、私は彼の生活は早々行き詰まるかもしれない、とも実は予想していた。それでも、彼がすぐるように賭けている可能性に委ねてみようと思った。

彼は私との出会いをよろこび、会うたびに私への感謝を口にし、いかに新生活がうまく行っているかとその様子を報告に訪れたが、それは彼の思い込みであり、実相と異なることは明らかであった。しかし、私はあえて触れず彼の言葉に迎合した。また、彼の私への要求はたびたび度を越し、私は彼との関わりを負担に感じ始めた。

何十件もの他の担当事件の負担も大きく、私は彼の生活が現実的にほころび始めてきていたのに、他の担当を優先し、彼を放っておいた。すぐに彼は再犯事件を犯し逃走した。警察の探索を逃れながら、彼は家裁を訪れ私に会いに来た。あまりに消沈した様子を怪訝に思いながらも、私はおざなりに面談して、彼と別れた。

すぐに、彼は逮捕され、再び少年鑑別所に収容された。

もう記憶に過ぎなかった。過去のことである。

しかし、その過去はそのままにも残っていた。彼に対し詫びねばならない、という思いである。しかしどう詫びればいい。詫びてすむことではない、人生のことだ。彼の事件報道を見るたび、その傷がひそかに痛んだ。

彼の謝罪を聞き、二十年前に封印した情動が奔流になって爆発した。

僕の方が、僕の方が、すまなかった、すまなかった。

私は滂沱の涙を流し、一心不乱に彼に詫びていた。おんおんと、私は泣いた。

詰所で面会は今日を最後にもう認められないことを告げられた。

通い慣れた街路樹の下を歩きながら、唐突に込み上げる嗚咽をどうすることも、できなかった。

*

茶封筒には便箋に記された私宛の手紙が入っていた。刑務官某との署名がある。読み進み、あの大柄な係官とわかった。

そこには執行の様子が記されていた。

彼は荒れた。調査官のせいで生活が破綻した。起こさなくともいい事件まで起こしてしまった。どうしてくれる！と涙浮かべながら、私に殴りかからんばかりに怒った。

私は彼の挫折感の大きさと別に、自分がこの事態を予測しつづも放置してしまったことに愕然とした。それは回避できたはずであった。甘い見通しのまま放置したのは、彼の私への感謝や尊敬に私が酔っていたからだ。よく思われたという私の個人的利己心が、彼の現実を直視させなかった。この事態は私のせいだ。私は惹き起こした現実に呆然とした。

彼の人生に取り返しつかない打撃を、私の愚かさのせいで与えてしまったという自責の念がきりきりと心を苦しめた。

彼の再犯事件は私のせいだ。なのに、彼は再び三度目の少年院に送致され、本来罰せられ責任を問われるべき私には何の措置も加えられない。自罰的心情に私は吞まれた。

審判法廷で彼は不貞腐れ、私に憎しみをぶつけた。その目が忘れられなかった。

私は人の人生に関わることの恐ろしさを学び、善意に潜む醜悪な利己心を以て思い知った。

その六年後に退職したが、彼との体験を超えることも、その傷跡が癒えることもないまま、尾をひいていた。

数十年を経て、様々な人生の局面を体験し、彼のことは

確定後七年を経て、彼も四十代後半にさしかかり、髪は白くもう中年男性の風貌であったという。

彼はその後敬虔なキリスト教徒となり、日々を祈りと読書に送っていたらしい。

その前日、勤務の終了後に彼の執行を告げられた係官は、相当に動揺したことが記されている。命に背くことの許されない立場ゆえに、このときほど自分が刑務官を志し、死刑囚舎房に配属となったことを恨み後悔することはなかったという。特に長年にわたり最も親しく言葉を交わしていた者に執行せねばならない苦痛は筆舌に尽くしがたく、体調を崩し精神の問題を抱えるなどして、早期退職に至る者も少なくないらしい。

その朝早く彼に出房を促したのは年配の刑務官であった。他の死刑囚の房が並ぶ廊下で大騒ぎとなることを避けるため、ただ事務所へ行くのだと偽ることも多いが、彼はすぐに察知した様子であったという。

刑務官に挟まれ、事務所ではなく、刑場に向かう。それは表示のないドアの向こうである。

押されるように、前へ前へ進み、たどり着いた部屋には教誨神父と係官達がいる。

彼は呆然として血の気の引いた顔をしていたという。

所長が、法務大臣の命令があったことを告げる。その後

ろに、その係官は待機していた。

祭壇の十字架の前で神父が祈りをささげ、最期に書き残す言葉を彼に促した。彼はペンを手に取ったが、しばらくして、何も書かずペンを置いたそうだ。立ち上がる彼に有無を言わず、強い力で目隠しをして手錠をかけ、足を縛る。そのままその位置に押し出すようにして首に縄をかける。首席官が手を挙げる。落下する彼の身体。

そのときなんらか抵抗する者が多いが、彼はされるがままに委ねていたらしい。また抵抗すらできず身体が硬直してしまふ者が少なくないが、彼の身体は柔らかく何かに託し切っているようであったという。

彼の心中はわからないが、面会室で彼が話した、あんなの手で殺して欲しいと言ったという老人の話をあつて思い出し、持つて行きどころのない痛みが心が張り裂けるようだったと記されてある。どうして人が人を殺さねばならないのか、この執行の様子を一度見て欲しい、執行を体験して欲しい。死刑などなくなればいい、とある。

あなたには告げたかったのだと。彼はこうして処刑されました。こうして今生の人生を終えました、と。

また、法が改められ、親族以外にも面会が認められるようになった際、彼にあの先生を面会に呼んだらどうかと刑務官が尋ねたことがあった。彼は黙って首を振って、ノー

トを手に取り、ここで毎日会っている、とにこりとして言っていた、という。

便箋をたたみ、封筒に戻し、そしてノートをもう一度手に取った。

表紙には、表題が書かれてある。「面会室」。

それは、私に話しかけるように記された毎日の日記だった。

腰を下ろし、机でノートを読んでいると、揺れるカーテンに押され、重ねていた冊子が音を立てて床に落ちた。

ああ、榊君か。もう来たのかい？

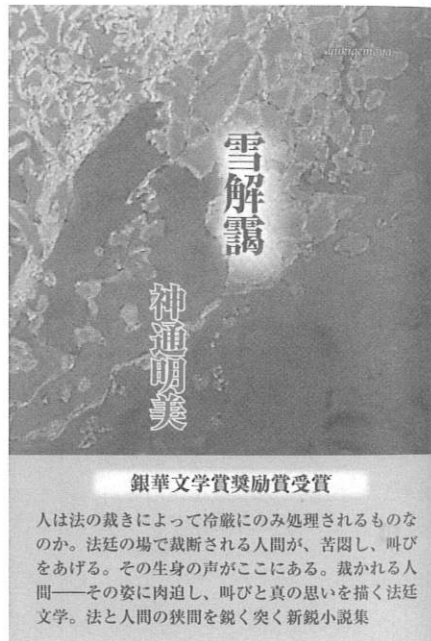
僕は心で尋ねた。

いつかの面会室の会話。

「死んだら、化けてますわ」

「大歓迎だ」

榊君、歓迎するよ。



人は法の裁きによって冷徹にのみ処理されるものなのか。法廷の場で裁断される人間が、苦悶し、叫びをあげる。その生身の声がある。裁かれる人間——その姿に肉迫し、叫びと真の思いを描く法廷文学。法と人間の狭間を鋭く突く新鋭小説集

裁判の前の現実を素材にした珠玉の短編集

御注文はアジア文化社まで

送料とも 1600 円

☆「文芸思潮」は下記の書店で店頭販売されております。

【東京】

ジュンク堂池袋本店

紀伊國屋書店新宿本店

書泉グランデ（神保町）

【大阪】

MARUZENSジュンク堂梅田店

【インターネット】

アマゾン

五十嵐勉

聖丘寺院へ

ノンチャン、

NONGCHAN

Tsutomu Igarashi



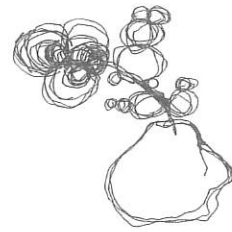
アジア文化社

五十嵐勉のカンボジア難民を描いた渾身の力作小説集
御注文はアジア文化社まで 送料とも 1800円(税込み)

受賞の言葉

原 浩一郎

二十代から三十代にかけて、家庭裁判所で様々な人生をお聞きする仕事をしていました。耳を疑うような信じがたい話もしばしばで、当初は「事実は小説よりも奇なり」と言うが、現実の底知れぬ巨大な深淵に比べれば、人の手による創作などあまりに薄っぺらで小さい」と現実に圧倒されつつ思っていました。しかし、それでも、いつの日にかそれらを物語に結べるようになりたいといううずきのような衝動は抑えがたいものがありました。以来、さまざま人生の痛みに触れ同伴する体験を重ねる中で、耳目引く特異な人生でなくとも、どこにでもある日常の場面もまた等しく特別な重みやかけがえない深みがあることを感じられ



原 浩一郎

はら こういちろう
1955年鹿兒島生。家庭裁判所勤務の後、編集プロダクション等を経て独立。プログラマー、デザイナー、ライターとして各種ソフト開発に携わる。民間企業が運営に参加するPFI刑務所設立に伴い、受刑者のための教育教材ソフトを受託制作。受刑者とその周辺を描いた小説を執筆し、毎年播磨社会復帰促進センター(PFI刑務所)で教材に採用され使用されている。58歳、大津市在。

るようになってから、物語の力というものをあらためて信じられるようになった気がします。

七年ほど前から依頼に応じてぼつりぼつりと小説を書くようになり、応募のために執筆した最初の作品が今作となります。人の愚劣さ醜悪さがそのまま高貴さや尊厳でもある、そういう抱擁の地平をなんとか描きたいとの思いで、物語を結びました。

今回、思いもかけない評価をいただき、心から喜び感謝すると同時に、まだまだ現実の深みに迫りきれず描ききれない力のなさを一層恥じ入る思いです。これを励みに、いよいよ骨身削り精進せねばと自分を叱咤しています。ありがとうございました。

背信

来の宮あんず

翔……。翔はどこにいるの？

探し求めてさ迷う身に、狭い町の風は冷たかった。耐え切れず逃げるようにして町を抜け出し、都会に住むようになって五年後、八歳年上の孝之と結婚した。「ほくと一緒に人生を歩みませんか。決して不幸にはしません。仲良くやっていきましょう」人の妻になることが念頭になかったわたしに、決して不幸にはしない、仲良くやっていこう、という彼に、以前から親しかった人のような近しさを覚え、救いの神にも菩薩にも感じ、幸せな人生を送り出せるのではないかという予感に、彼との結婚を考えた。しかし、相手を不幸に陥れ兼ねない結婚はすべきではない、と

いう思いが一方にあった。わたしの心の中には、あの日以来の、翔がいた。昏睡から覚めたわたしの傍らにいないはずの翔は、いなかった。二人の仲を喜ばない翔の父親、本田龍三の所業に相違なかった。引き裂かれた身はじっとしてない。翔を探し求めてわたしの心は十八歳のまま止まっている。そんな心の中へ、果たして孝之の愛を受け入れる隙間が残っているだろうか。僅かな希望を求めての、思い切った結婚であった。

製薬会社へ出勤する孝之を、一日何事もなく仕事を終え、わたしの元へ帰ってきてくれることを願いながら、彼は大事な人、わたしにとって大事な人、彼に伝えるには彼を愛

する以外にない、愛さなくてはならない、と深く心に言い聞かせ、見送った。しかし、愛そうとして愛せるものでもなく、愛そうとすればするほどわたしの内が主張し、十八歳の時間の中に戻ってしまい、ふと気付くと、戻っている時間の中へ向かって、北への旅に出ている。

初めの頃孝之は、行き先を言い出し兼ねているわたしに、「車で送ろうか」といった。しかしわたしは、送られることを拒み「桜のいい季節だから、のんびりと一人で……」とだけいつて断った。桜を見に、とも、紅山桜を見に、ともいわなかった。わたしをしきりに呼ぶのは北の地方に咲く紅山桜だ。しかしわたしには、咲き誇る紅山桜を眺めるだけではなく、孝之にはいえない別の理由があった。いえば、心の奥の秘めた思いを明らかにせざるを得なくなり、孝之を窮地に追い込み兼ねないことを知っていた。「桜の季節は過ぎていないか」という孝之に、北の地方の桜はこれから見頃であると応え、もう何もきかないで、黙って送り出して、という思いで、北へ向かっていた。それからの孝之は、執拗に聞き質すこともなくわたしを送り出した。

菓子や酒などの孝之への土産を両手に提げ、北の地方から戻るわたしに彼は、「風呂が沸いているよ」と迎える。笑顔での迎え方とは違うまでも、風呂の準備を済ませている彼を思えば、北への旅は止めようと半ば誓いを立てるの

だが、その季節を迎える頃になると、紅山桜の満開の花の下での、翔の声が聞こえてきて、じっとしていられなくなる。「僕たちはここでしか会えないのだから、ヒナちゃんに会いに僕はここへ来るよ。この紅山桜も僕たちを覗いてくれるしね」今頃翔はあの木の下でわたしを待っていてくれるのではないか、という希望を胸に秘めて、わたしは北へ向かう。苦い思いを味わったあの田舎町でわたしの心が癒されたのは、翔と翔の母から受けた愛だけであった。翔を切り離しては、わたしの人生は考えられなかった。

心臓の病気を持つ母とあの田舎町へ越して行ったのは、父が過労で倒れて間もなくのことで、わたしが少女の頃だった。父の友人が所有する古い家の留守番を母が引き受けたのだ。その家は本田龍三の会社の敷地続きにぼつんとあった。「この小さな田舎町にこんな大きな会社がある」母が床の中でいった。その通り町の一区画は紳士服製造業を営む本田龍三の会社の建物で埋め尽くされていた。そこで働いている何人かは土地の人であったが、ほとんどは近郷から通ってくる少年少女だった。度々発作を起こす母を考えると勤め先は近いほどよかった。わたしはその会社へ十八歳で就職した。龍三の一人息子で同い年の翔とも親しくなった。翔の母はわたしの手を取って「翔のいいお友達になってね」といった。そのにこやかな顔はわたしの心を温めた。しかしその幸せとは別に、土地の子供たちは、な

ぜかわたしの家の周りをうろろし、窺り取った草や拾った石を投げ込むなどして悪さを働いた。焼いた菓子を握らせようとすると、一斉に逃げた。逃げた先で、こちらを見て、「やあい、ボロうち」と叫んだ。わたしの姿が消えると、またやって来て、家の周りをうろろした。逃げては来、来ては逃げる子供たちの行動に、たかが子供のすることではないかと思いがながらも、重圧感を拭い切れないうでいた。ある日庭で花の種を撒いていると、わたしに向けて、子供たちが石を投げてきた。石はわたしの頭に当たった。偶然やって来た翔がそれを見て憤り、逃げる子供たちを捕まえてわたしの前に座らせた。「君たちのしていることは悪いことだ。この人は怪我をしたんだよ。きみたちが投げた石に当たって。なぜそういうことをするんだ。これからはしないな。わかったな」町では羽振りの利く本田龍三の息子とあって彼らは逆らえず、わかった、といって一旦は引き揚げていくのだが、わたしに向けて石を投げる彼らの行動が止むことはなかった。重圧感の子供のそれだけではなかった。祭りの寄付金も共同募金もわたしの家には集めに来なかった。単なる余所者扱いかそれとも母と子の暮らしに憐れみを抱いてか、あるいは因習に囚われた排他的町故か、わたしには理解できず、その衝撃の大きさは、石を投げる子供たちの比ではなかった。

すつきりしない中で翔とは急速に親しくなった。ミシン花の命が終わるまでは散らないのですよ」といった。わたしと翔は山道を登った。木々の間から遠くの雪山が見え隠れする。楓やブナが赤茶色の芽を吹いていた。落葉松の淡い緑も目に新鮮だ。辛夷が白い花をつけていた。中に混ざって紅色の花をつけた木が見えた。「あの木は何かしら。桃かしら。それとも桜？」わたしは立ち止まって翔に声を掛けた。「桃とは樹形が違うよ」翔も立ち止まった。「すると例の紅山桜かしら」「そうかもしれないな。きつとそうだ。そうだよ。紅山桜だよヒナちゃん」

わたしと翔は再び山道を登った。頂上近くまでいった時、桃の花と見紛うほどの紅色の花をつけた大木が突然目の前に現れた。「ヒナちゃん。桜だよ。桜の木だ。紅山桜だよ」青い空に紅色が広がっていた。木の真下へ行つて、空を仰いだ。紅色が空を塞いでいた。まだ満開になっていなかった。たくさん蕾が見える。蕾の濃い紅色が全体の花の色を一層濃く見せている。わたしと翔は木の下に宴席を設け、宿が用意した弁当を広げた。この日のためにと、翔が習いたての謡を披露した。

これハ鞍馬の御寺に仕え申す者にて候。
さても当山に於いて、毎年花見の御座候。

殊に当年ハ一段と見事にて候。

さる間東谷へ只今文を持ちて参り候。

いかに案内申し候。

を踏んでいるわたしの仕事場へ入ってきては、頬に指を当てたり顔を覗き込んだりした。

二人の仲を喜ばない翔の父親本田龍三が、それを見逃すはずはなかった。翔の相手は分相應の家の者でなくてはならなかった。翔の来ない日が続いた。わたしは翔を待つようになつた。そんなある日、翔が仕事の終わったわたしを裏口で待っていた。ほとんど人の通らない裏山の道を二人で歩いた。木の根元に腰を下ろした翔が「ねえヒナちゃん、この木は桜だね。ほくね、山桜の伝説を聞いたことがあるんだよ」といった。「伝説？」「昔ね、弾誓上人が自分の像を刻むのに桜の木を切ったんだって。ところが熱い血が流れ出てきて思うように刻めないんだ。それで上人は刻むのを諦めて、それを袈裟に包んで、箱にいれて、持ち帰ったんだって。熱い血を流した桜ってどんな桜だろうね。ブナの新緑に雪が舞って、山にその桜が点在する風景は、一度見たら忘れられないって。きつと素晴らしい桜なんだよ。ねえ行こうよヒナちゃん」翔の目が輝いていた。「どこなの？ その桜のあるところ」「新緑に雪だから北の地方だろう。調べればわかるよ」「でもその桜、この辺りとは違うの？」「違うんだろう、行つてみないとわからないよ」そしてわたしと翔は、季節も終わりに近いある日、北の地方に咲く紅山桜を見にいった。山の中の静かな温泉宿の女将が「まだ咲いていますよ。雨が降っても風が吹いても、

西谷より……

初めて耳にする翔の、声の響く素晴らしい謡だ。しかし翔は「こんな程度では謡えないな」と恥ずかしそうにいった。「満開の花見のすばらしさは十分に伝わってきたわ。今日の花見には、最高の謡だったと思う」わたしは思った通りを伝え、そして続けた。「でもどうして上人が自分の像を刻むのに紅色の花の咲く桜の木を選んだのかしら」「それはだね、厳しい修行の中で死と転生の世界を語っているという山嶽修験だけにある独特な権現があつてね。それで咲くことと散ることがほとんど同じ美しさの桜の木に彫ろうとしたのだろう。もともと桜の木には神の信仰があるから。ところが桜は桜でも……」「わかったわ翔。紅山桜だったのね。それで赤い血が流れ出てきたというわけね。わたしも無理に翔と引き離されたらきつと赤い血を流して泣くわ」わたしたちの仲を喜ばない翔の父親の本田龍三を脳裏に浮かべていついていた。「ほくはヒナちゃん以外の人とは結婚しないよ。父親には父親の考えがあつてのことだろうが、いつまでも反対させてはおかないから、安心して待っていてよ」真剣な翔の目がわたしの心を動かす一方で不安もよぎっていた。「待つていたらいいことがあるかしら。あの町全体がわたしを辛くするんですもの。だから居にくいし、わたし、あの町が好きになれない」「僕も自分が生まれた土地でありながら好きになれない。町が

閉鎖的で息が詰まる。まるで大昔そのままの差別意識を引き摺っていて。僕の父親がそれだ。相手を格付けする。代を任せるのに同等の格の相手でなくてはならないなどと。人物でなくて、格で……」「翔、止めて」わたしは聞いていられず涙が出た。「この際僕の気持ちをおいておく。しっかりと聞いておいてほしい。僕は、父が嫌いではない。とくに行動力のあるところなど、好きだ。尊敬もしている。しかしどうしても許せないのが、あの差別意識の強いところだ。それさえなければヒナちゃんを妻にして、父の会社の後を継ぐ。ヒナちゃんを妻にするのが条件だ。条件が通らないのであれば、僕は父の後も継がないし、この町にもいない。大都會の中でヒナちゃんと暮らす」翔は淡々と述べた。彼は父親を嫌ってはいない。それどころか愛している。尊敬もしている。後を継いでもいいとさえいつている。ただし条件付きで。父親の本田龍三が翔のその条件をどこまでも通さなかった場合、翔はどうするのか。わたし以外の人とは結婚しないといった翔は……。父を愛している息子としてどうするか……。

青く澄んだ空に雲が出てきた。土地の人が挨拶をして通った。今日の紅山桜は昨夜の雨で潤っていてもきれいで、と。

北の地方の花見から戻った翔は、ミシンを踏んでいるわたしの仕事場へは来なくなった。父親龍三の留守の間に花ころの小魚に絞られる。その餌がミミズによく似たゴカイという虫で、弁当箱ほどの箱の中でうようよ動いているそれを見ただけで背中から首筋から顔まで固まり、震えが走る。まして摘まんで釣り針に付けると寒さで鳥肌が立つ。「いつになったら馴れるのかなあ」孝之の目がわたしを軽蔑している。「だったら針に付けてくださいよ。黙って見ていないで」口を尖らせてそういうながら、餌の付いていない針を故意に水面めがけて投げ込む。笑うばかりで言葉の出ない孝之がわたしの竿を引き寄せ、箱の中で絡み合っているゴカイを一匹吊り上げ、五センチほどの長さで親指と人差し指で千切り、針に付ける。見ているだけでゲロがでる。魚釣りの同行は、本当は断りたい。しかしわたしには孝之の誘いを断る勇気がない。隠し事をするための、断れない。孝之を心から愛してこそ、幸せが来る。そんなことを考えながら、この日も、いつもの同じ釣り場で、苦手なゴカイに身を縮ませ、糸を垂らす。ふと、一案が浮かんだ。箱の中のゴカイに砂をたっぷり被せる。砂を纏って動き廻るゴカイを、横を向いて、鉄でちよきちよき切る。顔を背けたそのままの状態。今度針は、ゴカイが引く掛かるように、箱の中を掻き廻す。よし、これで引いてみる。引く掛かった針の先のゴカイがまともに見えないように細い目で、しかも、離して、見る。引く掛かるも

見に向かった翔を、龍三が許すはずもなく、わたしの仕事場への出入りを固く禁じたに違いなかった。会えないまま時が過ぎていった。

浴槽に身を預けようとしているわたしに孝之の声が響く。「湯加減はどうかかな？」 僅かに開いた引き戸から孝之の顔が覗く。瞬間わたしは苛立った。「入って来ないで。一人で落ち着いて入りたいからといったでしょう。早くそこを閉めて」わたしは孝之に嘸み付いた。目を見開いた孝之の驚きの表情は、只事でないわたしの様相から何事かを感じ取ったのだろう、黙って引き戸を閉め、静かに去っていった。その後しばらくは笑顔を見せることも言葉を交わすこともなかった。孝之には体の後ろ側を見せたくなかった。見せてはならなかった。そこには翔を忘れることのできない醜い跡があった。笑って見せられる日の来るまで、目を瞑ってほしいのだ。妻になってまだ日の浅いわたしは、孝之に手を合わせて泣いた。

気の重い日が続いていたある日、孝之がわたしを趣味の魚釣りに誘った。「海が呼んでいるから行こう」

明るさを取り戻した孝之の誘いに、わたしも気が軽くなり、一も二もなく受けた。結婚を控えた辺りでのデイトは常に魚釣りだったので、今回で数回目くらいにはなるだろうか。孝之の釣りは荒波の打ち寄せる磯での釣り、岩の間へ逃げ込んでしまう難しい石鯛釣りだ。わたしは浅いのだなあ、と針の先の砂を纏ったゴカイに苦笑する。これからは孝之の手を煩わせなくても済む。餌付けの心配はなくなった。今度は釣り上げた魚の数を上げることだ。どうすれば、魚は上がるか。尺取虫を思い出した。虫はどんなふうにして先へ進むか。進んでは、止まり、また、進んでは、止まる。その繰り返した。早速実行に移す。できるだけ遠くへ竿を投げる。そこからこちらへ引き寄せては、止まり、また引き寄せては、止まる。動く餌に興味を示して魚が付いてくる。わたしは孝之に向かつて声を上げた。「尺取り法よ。わたしの針に次から次に魚が来るわ」「君は素晴らしいよ。釣るための方法を考えだすなんて。それに磯へ来た時の君は普段にはない明るさがあった。僕は好きだよ」水面のうきから目を離さず表情も変えない孝之に、褒められているのかうわべだけのお愛想なのか疑わしく、横顔をじつと見る。——この人はその辺りにいるオジサンだわ。色気も何もない八歳年上のオジサン。妻のわたしをどんなふうにも思っているのか。この女を一生みていく義務がある。多分そう思っているに違いない。義務。それ以上のことは考えていないだろう。するとわたしは彼に保護されているということか。腹を割ってざっくばらんに話し合える相手ではない目上の人間、父親。そんな存在。父親でもない保護者でもない平らな人であったら何と素晴らしいことか。翔はそんな人だ。わたしはせつせと水面に糸を垂

らす。脇見をしている暇は尺取り法にはない。真剣に水面のうきを見る。しばらくすると、魚が餌を食わなくなった。それでもわたしはうきから目を離さない。孝之も釣れていないようであった。水を張った袋の中には一匹の魚もいない。「こう釣れないと疲れがどっと出てきて、気分転換にはならないな」珍しく元氣のない声で孝之がいった。――疲れが……。仕事人間の彼の口から出た言葉とも思えない。人間疲れると最悪な道を辿ってしまうことを、わたしは知っている。孝之を疲れさせてはならない。「帰りましょう。釣りを止めて帰りましょう」「大丈夫だ。潮の流れが止まったから魚が動かなくなっただけだ。そのうち釣れるさ」しかし孝之の声に力がない。「ダメよ。帰りましょう。釣りはいつでもできるわ」わたしは孝之を急ぎ立て、釣り道具を纏め、帰り支度を整え、帰路に着いた。孝之を疲れさせてはならない。車を運転する孝之の、どうかすると閉じたり開いたりする疲れも極限に来ているまぶた。「この先のサービスエリアで休憩を取りましょう」無理にも、取らせたかった。しかし孝之は、大丈夫だ、といって速度を落とさない。「大丈夫じゃないわ。事故を起こしては元も子もないわ」エリアに近付いても依然として速度を落とそうとしない。「わたしが休憩したいの。疲れが限界にきているから。お願いだからエリアに寄って……」孝之は仕方ないという顔をわたしに見せ、駐車場に車を向けた。わたし

は休憩など必要ではなかった。疲れてもいなかった。大事な孝之を疲れさせたくないだけだった。疲れの後にくるものを、わたしは知っていた。その恐ろしさを、知っていた。孝之にその恐ろしさを味わわせてはならなかった。あの町には、わたしの疲労を恢復されてくれる者は一人としていなかった。

人員整理を理由に会社から解雇され、隣町の花屋で働くようになったわたしの前に、ある日突然翔が現れた。「見合いの日が決まってしまったよ」押し殺していた翔への思いが一気に噴き出した。「断って。ねえ、断って」「断れると思うか。あの父親に逆らえると思うか。仕方ないから見合いだけはしようと思うんだ。結婚はしないよ。信じてよ。その間に僕たちのことを考えよう」彼が見合いをする。わたしは置き去りにされた。塞ぎ込む日が多くなった。見合いの様子ばかりがちらつく。信じてよ。翔はそういった。だが夢の中の翔は遠くへいってしまふ。手を伸ばして捕まえないとしても、届かない。

翔の見合いの日が来た。彼からは何の連絡もない。婚礼の日取りが聞こえてきた。狭い町の中は目出度い話で沸き返った。翔と歩いた町の中をどのような顔をして歩けばいいのか。食欲がなく、眠れない夜が続いた。体が弱っていた。翔の来るのを待った。「ヒナコ、何か食べないと体が弱ってしまうよ。元氣を出してくれないと母さんまで悲

しくなってしまうじゃないの」母が床の中で涙を流した。この母に涙を見せてはならない。自分に言い聞かせてきたつもりが身も心も疲れ果ててしまっている。

翔の婚礼を間近に控えたある朝、声を掛けた母に返事がない。顔を覗いた。青白い顔が動かない。「母さん。母さん」顔に手を当てる。冷たい。死んでいる。母さんが死んでいる。「母さん」母はわたしを残して死んだ。わたしを心配して死んでいった。わたしが心配を掛けなければ長く生きていられたのに。わたしが母を死なせてしまった。両手で母の冷たい顔を包んだ。枕元に、預金通帳が置いてあった。手紙が添えてある。通帳には積み立てた金が記入されている。手紙の文面は、翔を忘れるためにこの地を離れたほうがよい、というものであった。この町はわたしたち親子には住みにくい、と母がいったことがあった。自分もこの町から出て行きたかったのではないか。翔から離れられないわたしのために我慢したに違いなかった。翔の見合いが決まった直後、家に帰ってみると、母の姿がなかった。茶托に載った茶碗が、テーブルの上にあった。客か。滅多に客のない家に客が来た。母は台所にいた。両手で顔を覆い、後ろ向きに立っていた。「どうしたの母さん」「遠い所へ引っ越してくれるようにと、纏まった金を持って……」本田龍三の使いの者がやってきたという。「情けなくて」と母は頬に流れる涙を拭いた。「それで？ 受け取ったの？」

「受け取らない」当然よ。叩き返してやればよかったのよ。うちは貧乏じゃないわ。多すぎるほどのお手当をもらっているわ。会社重役であった父の存命中は親子三人都会の大きな家に住んで何不自由のない生活をしていたわ」立派な劇場へ芝居も見にいった。田舎では見られない能楽の舞台も見た。白い頭髪の上に大きな竜を乗せた老体が舞っていた。広い袖の金襴緞子の能装束を身に着けて。老体は白い髪を肩の上いっばいに広げて、一部を胸の上に流して、腕を横に張って、金色の目で前方を睨んでいた。失った釣針を探しに竜宮へ行き、竜神の娘と結婚し、釣針を手に入れて帰る、という海神竜王の神話だ。わたしの大好きな神話。あの海神竜王の舞台をもう一度見たい。この田舎の町にはそんな劇場はない。わたしの子供時代は恵まれていたのだ。決して貧しくはなかった。貧しい家の子もいた。母親と二人だけの子もいた。靴を買えない家の子もいた。父も母もわたしも彼らを差別しなかった。みな仲良くやっていた。「父親の欠けた母と娘の借家暮らしはそれほど哀れか。除け者にされるほど見るに忍びないか。家がボロで何が悪い。借家暮らしで何が悪い。両親の揃った財産家の娘なら息子の嫁にと喜んで迎えるのか……」わたしの怒りは収まりがつかない。結婚を許してもらおうべくわたしと翔が本田龍三の前に跪いた時のことが蘇る。龍三はわたしに、これで翔との関わりを絶ってくれ、といって小切手の入った封筒を

握らせた。わたしはその惨めさに耐え切れず思わず突き返し、家に向かって走った。僕はヒナちゃん以外の人とは結婚しないよ、といった翔の声が背中中に張り付いていた。たった一人の肉親である掛け替えのない母をわたしは自分のわがままから死なせてしまった。食欲のないわたしの体が目に見えて衰えていった。自分を取り戻すにはこの町から出ていくことである、と知っていたながら、引き裂かれたままの翔を残して出ていけない。いつ朝が来て、いつ夜が来るのか知らないうちに過ぎていく。

本田の屋敷に新居が建った。翔は妻になる人と一緒に住んでいられるらしい。二人で歩いているのを見た。この頃姿が見えない。病氣らしい。何が本当か、人が取り沙汰した。

山の裾を電車がこちらに向かって走ってくる。稲を刈り取った田圃の上を風が吹き晒す。婚礼を間近に控えた幸せそうな翔の顔が頭の中いっぱい広がる。母の遺影が穏やかな顔でわたしを戒める。どこへ行くともなく這って裏口を出た。這う手に固く冷たいものが触れた。心身ともに疲れ果てた体は先へ進もうとしても進まない。後へも引き返せない。そのまま眠った。

目を開いた時、レールを握ってうつ伏しているわたしの周辺に人が大勢いた。手を伸ばせば届きそうなどころに電車が止まっていた。自分がどうしてそのようなところにいるのか思い出せなかった。裏口をいつどのようにして出た

たい。明日の婚礼は本田龍三の会社挙げての催しになるだろう。町の人は花嫁を一目見ようと集まってくる。翔と花嫁が固めの盆を交わす。人はそれを見て似合いのカップルだと絶賛するだろう。灰色の空が夜になって強い風と雨になった。トタン屋根に打ち付ける雨の音が体の芯を凍りつかせる。風は木を揺さぶり、家を震わせた。母の遺影が蠟燭の炎に濃い影を落としている。どのくらいうつ伏していたのか玄関の引き戸が開いた。息を詰め、聞き耳を立てる。開いたのではなかった。強い風雨に家が軋んだのだ。風はさらに強くなり、雨も強くなった。

孝之の額に手を当てる。熱がある。薬を飲ませなければならぬ。しかしわたしは孝之に薬を飲ませたくない。飲ませたら彼はどこかへ行ってしまう。きっとどこかへ行ってしまう。薬は怖い。孝之は大事な人。わたしに取って大事な人。どこかへ行ってしまうのは困るのだ。

引き戸が開いた。風と雨とが勢いよく吹き込む中を黒い影が近寄ってきた。翔だ。翔が来たのだ。嵐の中をずぶ濡れになって。ポケットにいったばいの薬を忍ばせて。一夜明ければ彼の婚礼が待っていたのだ。翔……

その夜、わたしと翔は、夜が明けるまでの僅かな時間、体を寄せ合い、最後の夜を温めた。そして朝が来る前に、二人だけの世界へ旅立ったはずであった。

「気が付きましたか」白衣の女性がわたしの顔を覗きこん

のか覚えていない。重なる心身の疲労に意識が朦朧としていたとしか思えない。母の穏やかな顔がよぎった。

孝之は、道の駅でも車から降りず、両手で抱えたハンドルに顔を伏せていた。わたしが助手席から、孝之の額の辺りに手を触れると、熱があるようだった。「風邪かも知れないわ」「大丈夫だ。大したことない。さあ行くぞ」孝之は熱のある身を奮い立たせ発進した。「無理をしないでね。もう少し行ったらまた休憩を取りましょう」孝之には元気でいてほしいのだ。

床に就かせた孝之に、絞ったレモンの、蜂蜜を加えた暖かい飲み物を与えた。風邪が治る飲み物であると、翔の母がわたしに教えたものだ。風邪こそ引いてはいなかったが、わたしも何度か飲んだ。「すっぱくてのめないよ」孝之がカップをわたしに返してよこした。「飲まなければ風邪は治らないわ……」飲まない孝之のためにバナナミルクセーキを作った。これも翔の母がわたしに教えた飲み物だった。生卵にバナナとミルクを加えて溶いたものだ。孝之は飲んだ。「おいしい?」「おいしい」「もつと飲んで。ぐいぐい飲んで……」ぐいぐい飲んだのは孝之ではなく、翔だった。わたしは孝之に飲ませているつもりが、翔に飲ませていた。翔の婚礼が明日に迫った日、空は朝から灰色だった。翔はどうしているのか。信じてよ、といったあの言葉は嘘だったのか。なぜわたしに会おうとしない。翔の本心が知り

ていた。「翔……。翔……。翔はどこ?」辺りを見廻した。翔がいない。見慣れた家具や置物がない。わたしの家ではなかった。「わたし、どうしてここにいるのですか?」「運ばれてきたのです。二日前に……」それで翔はどこに?」「ここへ運ばれてきたのはあなた一人です」「一人?」すると翔は死んだんですか。死んでしまったんですか……」「さあ」わたしはベッドから身を起こし看護婦の胸を掴んで揺さ振った。「翔が死んでしまったらわたし、この世にはいられないのです」「もう大丈夫ですよ。退院できますよ」「退院してもうちには誰もいないのです。母は死んでしまっていて迎えにきてくれる人はいないので」看護婦はわたしの手を払うようにして、出て行った。翔はわたしを残して天国へ逝ってしまった。翔は天国へ逝ってしまった。わたしは取り残された。手にいったばいのあの薬はどこへ入ってしまったのか。喉を触る。薬はここから落ちていったのだ。あの薬はどこへいったのか……。胸を触る。腹を触る。「翔一人を天国へ逝かせてしまつて、わたし、この世に残ってしまった……。翔……。翔……」

暗い部屋の、仏壇に灯をともし。母の遺影が浮かび上がった。たった一人、家の中で、翔を呼び続けた。

町の餓鬼どもが家を取り巻き、罵声を浴びせた。「心中未遂やーい」「死に損ないの二人やーい」——二人。二人といった。確かに二人といった。翔は生きている。生きて

いるのだ。「翔……どこにいるの、翔……」二人とも生きていのになぜわたしだけがこの病院に連れてこられたのだ。本田龍三だ。事ここに至ってなおも二人を別れようとしている。翔は他の病院へ運ばれていったのだろう。それとも、家か。翔の父親本田龍三は、生木を裂いた。赤い血が流れ出る生木を裂いた。裂かれた生の木はいつまで経っても血は止まらない。翔に会うまでは、止まらないのだ。本田龍三よ、それを知っているか。

「翔はどこにいるの？ 翔……。翔……」翔を探して工場への道を歩く。わたしのかつての仕事場が見える窓際に立つ。ミシンを踏んでいるわたしの顔を覗き込んでいたあの時の翔は、いない。この家のどこかで養生をしている。それとも、大都會の病院へ運ばれて、そこで恢復を待っているのか。わたしは翔とは別にされて、狭い田舎町のこの病院に入れられた。せめて同じ病院に入れてほしかった。せめて同じ病院に……。 「翔、どこにいるの」裏山の道を二人で歩いた。翔が腰を下ろした木の根元に座り込む。忘れられない翔との思い出が北の地方にある。青空を紅色が塞いでいた。真下から見ると満開の紅山桜だ。——きれいだつたわね、翔。もう一度行きたいわね、翔。裏の山道を一人でとぼとぼと家に向かって歩いた。餓鬼どもが家の中を覗いていた。彼らはわたしを見て、口々に、心中未遂やーい、といつて逃げ、家に向かって石を投げた。町の中は、心中未

ぬ機嫌のよさでわたしを送り出し、迎える。隠し通そうとする妻の行動に不審を抱くことはないのか。どうして平常心でいられるのか不思議でならない。わたしの心の中には生木を裂かれて血を流したあの時のままの翔がいる。孝之は大事な人。しかし翔の代わりにはならない。わたしは半身で孝之を愛し、半身で翔を恋していた。

その日は朝から雨であった。今が見頃の北の桜は咲いているだろうか。こんな日にこそ翔に会えるのではないか、という予感に、目を伸ばす気にもなれず、孝之に見送られて家を出た。北への列車に乗り、秋田の湯瀬に着いた。山や沢沿いに咲く雨の中の紅山桜を見ながら宿に向かって歩いていくと、女将がわたしを見付けて駆け寄ってきた。「いつもこうなんですよ、ここは。風かと思うと雨、雨かと思うと風なんです。夜のうちに水を吸った花が早朝の柔らかな光に包まれて照り映える一瞬は、怖いほど美しいのです。通常目にする山桜より花の色が濃く、花もやや大きめのため、大山桜ともいわれているのです。この雨が止んで、明日の朝は輝く桜が見られるといいですね」耳に覚えのある話を女将はこの日もした。夜半に雪になった。雪はみぞれになり、みぞれがまた雪になった。

翌朝、雪は止んでいた。透明な空気の中でブナの新芽が光った。キブシの黄の花が輝いた。わたしは山道を登り始めた。楓やブナの新芽だろう赤茶色の固まりの中に桃色の

遂一色になった。いつかきつと、ほとぼりが覚める。それまでじっとしてしよう。翔を探すのはそれからいい。そう思って家に籠った。「ここが心中未遂のあった家よ」町の外からも人がわたしの家を見に来た。中に当の本人がいようといまいと気遣いなしの、ずしりとくる重い声。もうこの町にはいられない。もういられない。翔を残して、無理にも体を列車に乗せた。

北の旅から戻るわたしに愛想のなかった孝之が、ある日、こぼれる笑顔でわたしを迎えた。「疲れただろう？ ゆっくり風呂に浸かるといい。夕食には君の好きなものが用意してあるから……」彼のその変わりように啞然とし、顔をじっと見た。食卓にはホタテやウニなどのうまそうな鮨が並んでいた。「どうした。早く風呂へ。ホタテが待っているよ」わたしは信じられない思いで風呂場へ向かった。——あの機嫌のよさはどこから来ているのか。この際過去のすべてを明らかにしたほうがよいのではないか。しかし彼の機嫌のよい理由が、何を根拠としてのことかわからない以上、逆効果になりかねない可能性十分だ。翔が心の中に存在している限り打ち明けるべきではない。孝之を苦しめるだけだ。わたしは背中側の、翔との思い出の跡に手を触れ、どれ程機嫌よくわたしを迎える孝之であっても、翔を恋い慕う気持とは別のものを感じていた。

一週間の日程での、北の旅は続いていた。孝之は変わらず山桜が姿を現した。紅山桜だ。わたしは思わず立ち尽くした。あの時の翔も立ち尽くした。風に舞うしぶきが光った。近付いて桜を仰いだ。そこには翔はいない。桜は時に不気味な暗さを見せる。移ろいのはかなさを見せる。死の相を見せる。あるいは生の歡喜の表情を見せる。桜よ、ここへ翔を連れてきておくれ。翔がどこにいるのか教えておくれ。弾誓上人の刻む桜の木から血が流れ出たというあの話も一度聞かせておくれ。桜よ、翔はどこにいるの。どうして来ないの。ここにしかない思い出の場所へ。わたしがお父様を嫌っているから。それで来ないの？ 今ではあの時ほど嫌っても憎んでもいないわ。受けた差別行為が許せないだけ。翔と同じように行動力のあるところなど好きだし、尊敬もしている。だから来て。桜よ。翔を連れてきておくれ。

翌日も、その翌日も、翔は来なかった。一週間が過ぎた。翔は現れなかった。

あの町へ行けば翔に会えるか。あの狭い田舎町へ。わたしはあれからあの町へ行っていない。夢の中では行っている。本田龍三の紳士服製造業の工場はその時のままだ。心中未遂の家、と騒がれたかつてのわたしの家はなぜか夢枕には立たない。恐ろしさに触れたくない思いが夢をも避けているのか。そのような恐ろしいあの町へは踏み込めない。当時の面影もない年をとった女が男恋しやと、なり振り乱して探し廻ったのでは笑い者になるだけだ。情けない姿を

曝け出す勇氣はない。翔よ、北の地方に咲くあの紅山桜の木の下へその身を運んでおくれ。

孝之との何の変哲もない暮らしの中で、ある日、庭で紅山桜の押し花の詰まったノートを焼いた。何ページにも渡って貼られた茶色に変色した紅山桜がめらめらと燃えた。翔との思い出のノート、焼きたくはなかった。だが孝之に見出されてはと、思い切って焼いた。翔への思いを煽り立ててノートは燃えた。「何を焼いたんだ」孝之が後ろに立っていた。「古いノート」慌てていった。「焼くことはないじゃないか。君の歴史だ」歴史——。わたしの歴史。それはまるであの田舎町での翔とのわたしを知っている言葉のようにわたしには重く響いた。自分の妻が心中し損なつた成れの果ての女と知ったら孝之はどう思うだろう。それでも妻として傍らに置くだろうか。知らずに妻としたことを悔やむだろうか。孝之には知られたくない。

その夜、翔の声を聞いた。「ヒナちゃん」耳元で聞いた。姿がない。声だけが聞こえる。わたしの意識が暗闇の中を探る。「翔。どこにいるの。翔——」やがて意識は裏山の道に飛んだ。ミシンを踏んでいるわたしに飛んだ。荒い息の下で翔を追って叫ぶ。「翔。わたしを一人にしないで。どこにいるの、翔……」わたしは額の汗を拭かれている。はっとしてわたしの手が汗の体の背中側に廻った。腰にいく。翔との思い出の跡がその腰にある。翔にはわたし

との思い出の跡がわたしと同じように、腰にあるだろうか。手は腰の違和感を撫でる。このわたしの腰の違和感を、翔は知らない。傍らの孝之の腕がわたしの腕に触れて、目が覚めた。

孝之の妻になって、どのくらいの時間が過ぎたか考える余裕もないまま、わたしの髪に白いものが混じり始めた。年が明けたある元旦、孝之と初詣に出掛けた。参詣する人も比較的少ない近くの神社へいくのが慣例になっていた。しかしその年は気分転換の意味もあって、人の混み合う神社へ足を延ばした。「混雑は覚悟で行つてみるか。よし行こう」孝之のその一言で行くことになった。境内は人混みで動きが取れない。前進も後退もできない中で十センチまた十センチと歩を進めていく。賽銭箱まで辿り着ける時間が計れない。わたしも孝之も、覚悟はしていたものの、どうすることもできず、身動きのとれない人混みの中で、黙り込んだ。わたしからは厭な溜息が出た。「こんな気持ちでお賽銭を上げては神様には迷惑かもしれませんね」「慣れているさ。神様は」「そうかしら」ふふふ。「ところでこの神社での元旦の初詣は今年で何回になるのかな」「結婚して十年後に来たのが最初ですから、それから二回は来ているわ。十年ごとに」そうか。僕は六十代に入ったか「わたしは五十三よ。幸せに年を取って」幸せか？「幸せよ」思いやりのある男と結婚してこの年まで生きてこれれよう

とは、あの時誰が知ろう。そんな幸せの中にいながらわたしは翔を忘れられないでいる。孝之を裏切り通して三十年。この先もどうなるかわからない。わたしは人いきれで気分が悪くなった。周囲の人の横顔が霞む。霞む横顔に、翔が映った。あれは翔だ。確かに翔だ。翔もこの賑やかな街に越してきているのだ。——翔。しかしこの人混みでは近

付けない。大声で呼ぶこともできない。めまいがする。おや、翔がいない。初めから翔ではなかったのだ。跡取り息子の翔を本田龍三が手放すはずはない。翔も、父親を尊敬していた。その父親を裏切つて、この賑やかな街に出てきているとは思えない。五十三歳になった翔は、あの町で父親龍三の跡を継いでいるだろう。わたしはこの人混みの中で、頭痛がしてきた。「大分近づいてきたな。でもまだまだだ」孝之が頸を伸ばして前方の賽銭箱の辺りを窺う。わたしは額に手を当て、眉間に皺を寄せた。「どうしたんだ。気分が悪いのか」孝之はわたしを抱えるようにして「道を開けてください、病人です、申し訳ない」と声を張り上げ、人混みを掻き分けるようにして抜け出した。境内には座るところはない。冷たい石段に二人並んで腰を下ろした。「ダメだ。腰が冷える。暖かい店にでも入ろう。それとも、家に帰って蜂蜜の入ったレモン水を温めて飲むか。どうする？」——蜂蜜の入ったレモン水。翔と飲んだあのレモン水。冷えた体を温めてくれる魔法の飲み物、レモン水。境

内を出て、家に向かった。孝之が体の冷えたわたしのために魔法の飲み物を作った。翔を頭に浮かべて、飲んだ。翔は人の混み合う賑やかな街に出てきてはいない。あの町から抜け出してはいない。翔のいるあの町がわたしをしきりに呼ぶ。

わたしはサングラスを掛け、腹を据えて、家を出た。男恋しやと気の触れた女に成り代わって列車に乗った。二時間後には到着してしまふ遠いとはいえない町。しかしわたしの取つては地の果てへ行くほど遠い。三十数年前、上りの列車に乗ったあの時、窓の外の景色を見る余裕はなかった。今もそれは同じだ。違うところがあるとすれば、あの時は体を休める部屋はなかった。だが今は帰る家があるということだ。そこには優しい夫、孝之がいる。わたしはそれを痛めながらの嘘。見覚えのある駅に列車が着いた。降りようとする思いとは裏腹に母を失ったあの頃が思い出され、腹を据えて出てきたはずが、体が硬直して、座席から離れられない。停車時間はその割に長い。一人の客が乗ってきた。この町の者だろう顔を見られたくない。通り過ぎるのを待つて座席を立ったその時、列車が動き出した。何食わぬ顔で別の車輛に移り、次の駅で下車し、上りの列車に乗った。あの町へは踏み込めない。わたしはある決意を持つ

て、孝之が待つている家に戻った。

孝之は夕食をとっていた。彼の好きなカレーそばが芳香を放っている。「お、早かったじゃないか。君に刺身が用意してあるよ」わたしは自分の部屋へも行かずそのまま孝之を正面にして緊張した面持ちで椅子を引いた。「今日、あの田舎町へ行ってきました」不愛想にいった。その声が彼に届かなければよいとさえ思った。「あの田舎町って？ 君が娘の頃にいたというその町のことか」「そうです」「それで？」「今ではもう母もいないし、苦しい思い出もあって、町を歩いてみる気にもなれず、そのまま引き返してきました」「そうか。気の向いた時にまた行けばいいじゃないか」さりと受け流す孝之にわたしは話の糸口を掴めず、焦った。自分からは言い出さたくない過去を包み隠さず打ち明ける覚悟で、帰りの列車に乗り換えたのだ。侮辱されようと離縁状を突き付けられようと覚悟の上で……。そしていった。「あの町はわたしを死に……」「言いたくないことはいわなくていい」「聞いてほしいんです。どうしても聞いてほしいんです。わたしが十八の時」「止めるんだ。それ以上いうな」「言わせて。一緒に菓を飲んだ。死ぬつもりで飲んだ」「わかった。もういい。ほくは知っているよ」——知っている。血の気が引いた。背に震えがきた。衝撃の激しさが頬を流れる涙を止めた。——知っている。

る。わたしの体の中の何かが変化した。背負っているものが重くなったのか軽くなったのかわからなかった。だが体に変化が起きたことは確かであった。ふわふわ、というのか、何かが抜け落ちて軽くなった、というのか、これまで味わったことのない体になっている。——知っている。「いつ知ったんですか」落ち着きを取り戻すようにしていった。「風呂の加減を聞きにいった時の君の様子が普通ではなかった。しかしそれほど気にはならなかった。結婚後間もない若い女性には有り勝ちなことだろうと……。それから数年が経った頃だったか、都会からさほど離れていないところに営業所ができた。その先迎りに、君の故郷があったことをふと思いついて、ある時、行ってみた。営業所から車で十分余りだ。そこにその町はあった。何も無い田舎町の駅前にはコーヒー店が一軒あった。何となくその店に入った。若い女の子がコーヒーを煎れてくれた。聞きもしないのに彼女は目を輝かせて話し出した。ほくはコーヒーを飲みながら聞いた」——今この町は静かになったが、一時は珍しいもの見たさに人が集まってきて、観光地のように賑やかだった。ヒナコとショウウの心中未遂事件のあった町という見出しで新聞の地方紙が取り上げたのがその理由だ。人々はヒナコの家を取り巻いた。その後すぐにその家は取り壊されて更地になったが、人々はそれをも見に来る集まってきた。「店の女の子はそういつてサービスのコーヒーを僕

の前に置いた。僕は初めて聞く妻の若い時の話に頭がくらくらし、胸の騒ぎを抑えることもできず、カップから立ちのぼる香りを黙って顔に浴びていた」孝之はカレーそばの器を脇へ退け、再び話し始めた。

「僕が二度目にその町を訪れたのは、疾うに年号の変わった僅か数年前だ。見覚えのあるコーヒー店には、いつかの若い女の子とは似ても似つかない老女がいた。満面の笑みで、いらっしやいませ、と僕を迎えた。老女は注文のコーヒーを煎れながら『どちらからおいでになったんですか』とやさしい声でいった。僕は黙っていた。『都会の方がこの町へ来られることは滅多にありませんから、一目でわかるのです。緑を縫って風に舞う見たこともない珍しい蝶を見付けた時のように、人の目がそれに釘づけになるのです。都会の人はきれいな水で磨かれるから美しいのですと、この辺りの人は、どういふのでしょうか、そういつて羨望の目で見るようなところがあるのです。以前、もう何年も前のことですが、御存じかもしれません、都会から来たヒナコという少女と、この町の翔という少年とが、生きる死ぬの事件を起こしましてね、大騒ぎになったことがあります。そのヒナコという少女も、多分美しい蝶のような存在だったのではないのでしょうか。それでこの町の人には、気軽には近寄れなかったのです。決してこの町は、排他的でも、因習に囚われた古い町でもないのです。静かで

いい町です」老女はそういつて微笑を浮かべ、カップの熱いコーヒーを僕の前に差し出した。でもどうしてこの町へ、という彼女の内面もその表情から見え隠れしていた。『うまいコーヒーですね』僕が何気なくいうと、『やはりうまいとおっしゃってくださいるご老人の方がいらっしやいます。奥様の分も一緒にお持ちしております。奥様はお優しい方で、和菓子に抹茶を添えてわたしをもてなしてくださいます。時には、バナナミルクケーキであったりもします。ご夫婦とも、お年がお年ですから、店にはおいでになりません。それに旦那様のほうは、この町の、顔、ですから龍三さんといつて。あの事件の、ヒナコというお嬢さんとショウウさんの。その翔さんのお父様です』——ヒナコとショウウの未遂事件、忘れたくても忘れられない重い記憶として僕の脳裏に深く食い込んでいる。龍三という人はその翔の父親か。翔は妻が十八歳の時の男……。老女の声は僕の考え事の中へ割り込んでくる。『二人は当時外国製の強い睡眠薬を飲まれたのです。その副作用で、翔さんの腰にも不気味な盛り上がった赤痣が出たのです。当時は外国製といえば、どんなものにも人が飛びついたので。それほど外国製はすぐれていたのです。今は国内産のものに目がいくのですがね。赤痣の出るような強い睡眠薬は今の日本にはないんじゃないですかねえ。よくは知りませんが

ど……」老女は店の隅の椅子に座って、当時は振り返っているような遠い目をしていった。『それで、今、翔という男性はどうしているのですか』僕は初めて質問らしい質問をした。『父親の龍三さんによる監禁状態の中で若い頃を過ごされ、後に龍三さんの会社を継がれ家柄にふさわしい女性を妻としてお迎えになったのですが、幾日もしないうちに、その女性が出ていっておしまいになりました。再びお迎えになった二度目の奥様も、日浅くして、出ていかれました。腰の赤痣が原因のようでした。それで翔さんは今、お一人でおられます』——痣が原因とはどういうことだ。そんなことで新妻が出ていくのか……。『あれだけの事件ですから、何もかもご存じの上で嫁がれたと思うのですが、現実には想像を超えたものであったのでしょうか。赤痣が、無理に引き裂かれたヒナコという女性に見えたということだそうです。翔さんの妻になる方は、ヒナコという女性以外には考えられないと、今となつては生死のほどわからぬその女性を、探しておられると聞いております。その女性の子供の頃の深い思い出の一つであるという両親に連れられていった劇場での、海神竜王を、部屋の欄間に彫刻されるなどして……。』僕は苦いコーヒを一気に飲んだ。外は夕日を浴びた緑が何事もなかったように微風と戯れていた。家への帰り道、どこをどのようにして走ったかわからない車の中で、妻の身の振り方について、考えていた。夫

としてどうすべきか。慕い続けている男の元へ妻を送るべきか。聞かなかつたこととして知らぬ振りをするか。ある日突然男の元へ走ってしまうのではないかと気を揉みながら……。多分世の中の夫たちは、知って知らぬ振りをするだろう。賢いやり方と自分を納得させて。実際賢いやり方には違いないだろう。事を荒立てない点に於いては。ならば自分もそれに殉ずるか。自分は妻を愛している。賢いやり方と自分を納得させるまでもなく、去られたくない。単純にそれだけのことだ。慕っている男のもとへ妻が行くというのであれば、無理に引き留めはしない。妻の幸せを望むからだ。しかし僕の内部にも利己的考えが存在しないとはいえない。心中未遂の男女が再び縁を結んで幸せになつたという例を知らない。なぜ、幸せになれないかは、僕にはわからない。時間が速度を上げて流れ、世の中が急速に変化していく中で、人の考え方だけが変化しないとは言いが切れない。行ってみて、こんなはずではなかつたと、後悔しても後の祭りだ。ここにいることが幸せではないか、と行ってやりたいというぬぼれもある。取り留めのない考え事をしてるうちに車は家の前に着いていた。妻は外出しているのだから中は暗い。案の定テーブルの上には短い文字のメモが置いてあつた。『行つてきます』それだけだ。それで十分分り合える夫婦になつている。出て行かないでくれ。どこへも行かないで僕のそばにいてくれ。僕は君を愛

している。離したくない。誰もいない家の中で眠れぬままに、北の宿にいる妻に向かつて、声を絞つた」

孝之は夕食の脇へ退けたカレーそばの器を手にとり、立つて行つた。しばらくして、わたしのための、刺身、根菜の煮物、澄まし汁などを運んできた。そして一瞬難しい顔をした。切り出す最初の言葉を探しているかのようにあつた。

「僕は君に悪いことした。謝らなければならぬ——わたしに悪いこと。孝之がわたしに謝ることなど何もない。

何を謝るといふのかどう考えても思いつかない。謝らなければならぬことがあるとすれば、孝之を裏切り通したわたしのほうではないか。わたしは孝之を愛しているかのように見せ掛け、翔を愛していた。そして翔に会いたがつていた。そんなわたしを優しく送り出す孝之には、わたしに謝罪する理由など何もない。「僕は君が苦しんでいるのを、君がまだ若い頃から知っていた。知つていながら言えなかつた。それが賢いやり方と判断したからではない。君の苦しんでいるのを見ると僕も苦しくなつて、言えなかつた。思い切つて言つていけば、君の苦しみが軽減、いや消えたかもしれない、と考えると、やはり僕は君に謝らなければならぬと思つたのだ」わたしに謝る理由とはそれか。わたしがその頃、そのことを打ち明けられていたら、孝之との生活を跳ね除けて勇んで翔の元へ行つただろうか。物見高い人の衰え切れないあの町へ。苦しみ抜いて泣き泣き

出てきてまだ日の浅いあの町へ。行かれるはずはない。孝之がわたしに謝罪することなど、何もないのだ。打ち明けられていても、わたしはあの町へは行っていない。今、同じようにわたしは、翔はあの町にいる、あの町から出ていない。そこへ行けば翔に会える。そう思っていないが、やはりあの町へは行けない。わたしには、見えないところでブレイキが掛かつていた。当時翔は、わたしの結婚を条件に会社を継いでもよいと父親にいつていた。許されるはずのない結婚を条件に。そんなたわいな条件、掛け替えのない父親の前では忽ち粉と砕け、吹き飛んでしまうに違いない。そして父親の認めた女性をありがたく妻に迎えるに違いない。わたしにはそのような筋書が、いつの頃からか、できていた。それがブレイキとなつて、わたしをあの町へ行かせない。どこかの土地で、静かに生きて、そつと消えてしまいたい、そんなふう思う自分がいて。あるいは、あの町の近くに住んで、翔を陰からそつて見たい、と思う自分もいる。年を経た今、あの時の約束をまともにも信じてはいない。その約束を相手が忘れずにいるとも思っていない。わたしは翔を求めて、翔が忘れられなくて、ただそれだけの理由で、北へ身を運んでいるのではなく、北への旅は、生木を裂かれた命の叫びだ。目覚めたあの時、かたわらの床に翔はいなかつた。憎むべきは本田龍三から受けた差別行為だ。龍三という人間のすべてではな

く、その中の一部、差別行為のみだ。翔がいつていた。「僕は父が嫌いではない。好きだ。行動力のあるところなどに好きだ。尊敬もしている。しかしどうしても許せないのがあの差別意識の強さだ」今のわたしは翔と全く同じだ。本田龍三そのものを恨んでいるのも憎んでいるのもない。父親を思う翔のように、好きにはなれないまでも嫌いではない。差別意識の強さの裏には、父親龍三の思惑があつてのことだろうと思えるようになった。ただし、わたしが受けた差別行為については許したとはいえない。引き裂かれた身が最後の血の一滴を流し切るまで、紅山桜はわたしを北へ誘うだろう。龍三氏よ、差別はよくない。苦しめられて泣く人間のいることを知っていてほしい……。すべてを忘れて先へ行くと、わたしは自分自身を叱咤しながら受けた差別が身から出ていかず、先へ進めない自分を情けなく思い、孝之へ、抑えられない気持が逆。「いつまでも北への旅に拘るわたしを、女々しい女だと思いませんか。わたし自身、そう思っているのです」「差別はよくない。決して許してはならん。君が受けた差別については僕も憤って止まない。君の彼への愛は、その差別の上に成り立ってのものゆえに、忘れようとしても、その差別の苦しみが存在する限り、彼への愛が消え去ることはないだろう。女々しいなどとは思っておらん。無理に忘れる必要はない。忘れようとしてもそこだけ抜き取ることで

きない君の歴史だ。抜き取っては成り立たない人生のページだ。どこかで静かに生きて、そつと消えてしまいたい、などと思わず、君を待っている彼のところへ、真つ直ぐに胸を張って、行くといひ。彼は今、両手を広げて君を待っている。君は、堂々と行ける立場だ。立場が変わったのだ。逆転したのだ。もう何も怖いものはない。先の見えない不安から解放されたのだ。胸を張って行くことだ。ようやく辿り着いた君の人生ではないか。喜んで彼の胸に飛び込みなさい——この人はわたしをよく観ている。深いところまで観抜いている。ここまでわたしのために気遣いを惜しまない人が他にいようか。胸が込み上げてきて、人前で見せることのなかった涙が毀れた。「あの町は、君が考えているほど人情の薄い町ではない。少女の君が輝いていたから気軽に近寄れなかっただけだ。君は風に舞う蝶だったのだよ。君の幸せは彼のいるあの町にしかない。君は彼のいるあの町へいくべきだ。行きなさい。そして幸せになりなさい」孝之はしきりにわたしを送り出そうとする。わたしは無理に、歪んだ質問をしてみる。「わたしをあの町へ送ろうとなさるのは、わたしの裏切りが許せないからではないのですか。正直にいつてください」「僕は君に裏切られたとは思っておらん。君が幸せになればと、思うからだ」わたしは自分の秘密を守るために、あなたに嘘を言い続けてきました。そんなわたしを許すとは思えないのです」「誰

にだつて大なり小なり秘密はある。取り上げるほどのことではない。胸にしまっておけばよいことだ。それが人に迷惑をかけることにはならない。どんな気持でどこへ行こうと、人の心を断ち割ってみることはできないのだから——抱いている秘密などちっぽけなもの。取り上げるほどのことではない。何と温情のこもった言葉か。落ち着きを取り戻したわたしの体が軽くなっている。「僕は知っているよ」彼がそういつた時、それを境に汚れた体の皮が一枚一枚と剥がれ落ち、心の姿勢が正されていつたのだ。心の姿勢が。孝之に殉じたい気持ががむしゃらに強くなった。自分からつぽになった気がした。それはどうということか。意識だ。孝之への意識。彼を深く意識していたということだ。意識の深さと愛とは同意語だ。すべてを知られて、ほつとして、心身がかるくなつたということではないか。もう理屈ではない。わたしに取って孝之は、わたしが愛して止まなかつた翔なのだ。探し廻っていた心の翔は目の前にいる孝之だつたのだ。常にわたしを離さなかつた孝之こそ、わたしが探していた翔なのだ。両手を広げて待っていたのは、孝之だつたのだ。わたしにとって孝之は、わたしのかたわらに在る掛け替えのない人。翔は、わたしの深いところで眠っている人生ページの人、なのだ。

時計が、二つを打った。午前二時だ。今日、たつた今、孝之の妻になつた気がした。すべてを脱ぎ捨て、からつぽ

になつた孝之の本当の妻に……。

ようやく訪れた幸せの中のわたしは、孝之の命が、失われかけていることに気付かなかつた。わたしが孝之の体の異変に気付いたのは、本当の妻になつてしばらくしてからのことであつた。胆管にできた癌が周辺の臓器をも犯していた。手の施しようのない状態であつた。物恐ろしい光景が浮かび上がり無意識のうちにわたしは叫んでいた。孝之が死ぬ。——孝之が死ぬ。死なないで孝之。死なないで孝之。——罪深いわたしをすべて許した孝之が死ぬ。幸せに酔い痴れるばかりのわたしは孝之の病気に気付いてやれなかつた。死なないで孝之——わたしを一人ぼっちにしないで——孝之は声を失つていた。耳に口を付けるようにして孝之を呼んだ。——孝之。——孝之。口許が開かない。孝之は死んでしまった。わたしを残して死んでしまった。取りすがつて泣いた。わたしは数日間、魂の抜けた人間のように部屋に籠つた。何日かして我に返つた時、わたしは玄関の隅に束になつて立て掛けてある釣竿を一本引き抜いた。この竿で孝之は石鯛を釣つた。磯の近くの岩の下にいる白と黒の横縞模様的美しい魚、石鯛を。孝之は石鯛の魚拓をとつた。魚拓は玄関の壁に飾られた。わたしは魚拓に手を触れ、孝之を呼んだ。孝之——。帰つてきて、孝之——。

四隅に止めてある古くなつた画鋏の一つがころりと落ちた。落ちた辺りの床に画鋏は見当たらない。探しているうちに

足が画鋏を踏みつけた。痛い——。画鋏を足から外して玄関ドアに向けて投げつけた。拾っては投げつけ、拾っては投げつけ、猛獣のように泣いた。孝之はもういない。死んだのだ。わたしは孝之を失ったのだ。孝之はもういないのだ。うめき声を出して泣いた。わたしは家じゅうをひっくり返して孝之の残して行った形跡を探し始めた。どんなものでもよかった。通勤に着ていた茶の背広。出掛けに着せ掛けた。着せ掛けた背中はずもう、ない。抱き締めた背広から孝之の匂いが胸に迫ってきてたちまち涙が溢れた。狂ったように探す手に、孝之のご飯茶碗が触れた。わたしを北の旅に送り出した後、孝之はこの茶碗で一人、食事を摂っていたのだ。静かに一人で。自分の幸せも考えずにわたしの幸せを考えて逝ってしまった孝之。背に着せ掛けた背広も、釣竿も、一人で食事をした茶碗も、かたわらから離すことはできない。からっぽになったわたしの心身へ孝之が染み込んでいく。楽しい思い出が蘇る。わたしをかたわらに乗せた孝之の車が大海原を横に見て、透き通った空気の中を磯に向かって走っていく。わたしは一人ではない。かたわらにはいつも孝之がいる。

受賞の言葉

来の宮あんず

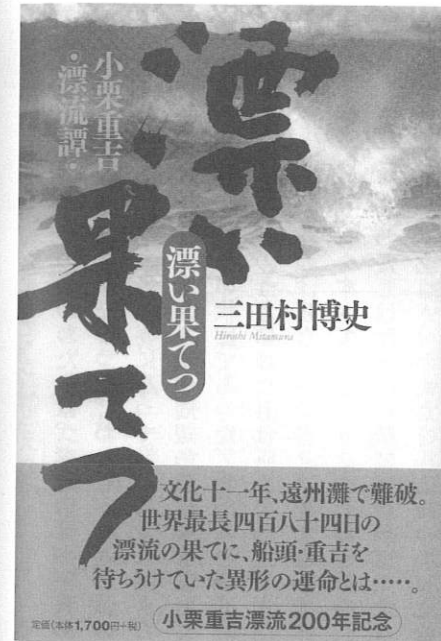
このたび、名誉ある「河林満賞」をいただくことになりました。この賞をいただくにあたって思い出されるのは、「文芸思潮」第二十一号の河林先生の選評の中の「マッチ売りの少女」でした。河林先生は次のように書いておられました。

「現実と非現実を見つめる眼差しこそ小説を書く人に求められるものではないでしょうか」

わたしはその文章を目にして以来、河林先生とマッチ売りの少女とが重なり合ってはなれません。祝賀会の会場でそのことを河林先生の奥様にお話ししました。奥様は笑みを浮かべてくださいました。名誉ある賞をいただくにあたりまして、たった今のこのように思い出されます。第四回の祝賀会に河林先生のお姿はありませんでした。選考委員の先生方ともども、ありがとうございました。

お知らせ

諸般の事情により今年より文芸思潮は年4回の季刊とさせていただきます。今年に移行期として1月、6月、9月、12月の発行となります。どうかよろしく御了解の程お願い申し上げます。



来の宮あんず

きのみや あんず

神奈川県生まれ

- 1952 大谷学園卒業（現横浜高等教育専門学校）
- 63 大手既製服会社の婦人服デザイナーとして勤める。その後、フリーになる
- 87 実用書「サンデーエプロン」出版
- 2007 第4回銀華文学賞奨励賞「石の鷲」
- 08 第5回銀華文学賞優秀賞「旅の人」
- 12 第9回銀華文学賞優秀賞「父の理想郷」

